

七〇年代イタリア・フェミニズムにおける家事労働賃金要求運動

——「労働」の定義をめぐる闘いとその「消去」——

伊 田 久 美 子

論要旨

一九七〇年代イタリアのフェミニズムの特色のひとつに家事労働への賃金を要求する運動があった。この運動の理論と要求は英語圏での家事労働論争を経て、国際的な女性のアンペイド・ワークの測定評価への取り組み等、労働や経済の概念を見直していく気運へと発展した。イタリアでは一九八〇年代以降、七〇年代フェミニズムの資料収集とアーカイブ構築が進められ、とくに八〇年代末から七〇年代フェミニズム史構築への取り組みが活発化してきたが、大部分の研究は今日に至るまで、家事労働賃金要求運動をイタリア・フェミニズムの傍流と位置づけるか、あるいはほとんど言及することがないままである。

本論文の目的は、七〇年代フェミニズム運動における家事労働賃金要求運動の同時代におけるプレゼンスとインパクトを同時代資料を通じて検討し、70年代フェミニズム史研究における無視、あるいは等閑視の経緯を明らかにすることである。またこの運動がめざした「労働」と「リプロダクティヴ・ヘルス・ライツ」の統合の今日的意義を考察する。

はじめに

第二波フェミニズムが産業先進国を中心に同時多発的に登場した一九七〇年代、イタリアにおいても特色あるフェミニズム運動が展開した。その社会的成果は大きく、離婚法、家族法改正、中絶法、男女雇用機会均等法制定、そして「名誉犯罪」情状廃止など、七〇年代から八〇年代にかけて女性をとりまく状況は大きく進展した。¹⁾

七〇年代イタリア・フェミニズムの多様な潮流の中で、その特色のひとつを構成し国際的なインパクトを發揮した潮流が家事労働に賃金を要求する運動であった。この運動のイデオログとして知られるマリアローザ・ダラ・コスタ (Mariasola Dalla Costa) が、イギリスのフェミニスト、セルマ・ジェイムズ (Selma James) とともに共著として刊行し、一九七二年にジェイムズによってただちに英訳された *Potere femminile e sovversione sociale* (女性の力と社会の転覆³) は、「労働」をめぐるフェミニズムの新たな定義を提唱し、七〇年代後半に英語圏で展開した「家事労働論争」と呼ばれる一連の論争の契機となった。この動きは七〇年代以降の開発経済学における「途上国」女性の労働の焦点化とともに、アンペイド・ワーク (無償労働) の可視化と評価という国際的な政策課題への展開にも一定のインパクトを与えた。国連女性の十年の最終年である一九八五年に採択されたナイロビ将来戦略一二〇条には家事労働の評価についての意義が明記されたが、その際もダラ・コスタの共著者であり英語への翻訳者であったジェイムズらによるナイロビ世界女性会議におけるロビー活動が大いに貢献したことは注目に値する⁴。こうした自明とされてきた労働や経済活動の概念定義に疑問を投げかけ、変更を迫る動きは、第二波フェミニズムの「個人的なことは政治的である」という著名なスローガンに示されるような近代的公私区分への異議申し立てに始まる世帯内の権力関係や労働の可視化によって開始された。家事は労働であるという主張は、資本主義の労働観を土台からゆさぶるラディカルな主張だった。

しかしイタリアにおいて家事労働賃金要求運動への言及は、あたかもある種のタブーがこの潮流を取り巻いているかのように、批判も含めて、八〇年代以降今日にいたるまで非常に少なく、言及される場合も多くは単に列挙する程度の限定的な記述にとどまっている。

イタリアでは、すでに先駆的には七〇年代から第二波フェミニズム運動関連資料館が各地で開設され始め、七〇年代末から八〇年代に入って本格的に取り組まれるようになった。九〇年代からは、インターネットを利用したネットワーク形成が活性化した。そうした動きの中で、保存された一次資料をもとにフェミニズム運動を記録、検証する研究が蓄積されてきた。しかしこれらの研究において、家事労働賃金要求運動、およびその運動体であったロッタ・フェミニスタ (Lotta Femminista: 「フェミニズム闘争」の意)、そして代表的な活動家であったダラ・コスタや、イタリアの運動に大きな影響を与えたジェイムズ等への言及は、皆無ではないにしても、きわめて限定的であり、それも補足的な記述にとどまっているのである。

マリアローザ・ダラ・コスタ、およびともに活動してきたジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタ (Giovanna Franca Dalla Costa) らの著作の訳者としての筆者は、労働論の転換に大いに寄与したこのグループの理論的運動史的貢献は重要であると考えており、イタリアにおける今

日までの、ほとんど無視に近い、言及されても単に列挙されるのみという周辺化された位置づけについては長年疑問に思ってきた。

経済格差の拡大と貧困に社会的注目が高まっている今日、日本においてもフェミニズム研究は労働問題へのコミットの不十分を問われることが少なくない⁵⁾。しかし日本を含めて七〇年代フェミニズムは「労働」を女性の視点から根底的に問い直す資本主義批判の議論を行っていたのであり、そうした問題意識は同時代において国境を越えて広く共有されていた⁶⁾。国際的にはアンペイド・ワークの測定・評価、ジェンダー統計・ジェンダー予算などの政策的取り組みの一方、アカデミズムにおいても九〇年代に入ってからフェミニスト経済学の立ち上げなど、既存の「労働」や「経済活動」の定義を問い直す潮流が登場した。ペイ・エクイティの職務評価における感情労働の評価やケア労働論も「労働」概念の見直しの具体化に挙げられるだろう。

しかしイタリアのフェミニズムにおいて、このような国際的動向は外国から入って来た議論として受容され、自国において展開した家事労働賃金要求運動との関わりが論じられることはなかった。「労働」概念の見直しとしての家事労働賃金要求運動の意義は今日に至るまでほとんど認識されていないと言わざるをえない。そもそも家事労働賃金要求運動がイタリアにおいて、どのようなプロセスを辿り、その後どのような足跡を残したのかについては、今日まで再構築されてきた七〇年代フェミニズムの歴史の中で、包括的に記述されたことはない。

本稿は、ロット・フェミニスタ（以下LF）と家事労働賃金要求（Salario al lavoro domestico, 以下SLD）運動の歴史を、八〇年代以降のフェミニズム関係資料収集保管とアーカイブ構築の運動における七〇年代イタリア・フェミニズムの歴史再構築の文脈の中で再検討し、イタリア・フェミニズム運動史におけるSLD運動の消去、あるいは周辺化を、七〇年代フェミニズム運動の歴史的構築の必然的プロセスとして読み直す試みである。

七〇年代フェミニズム運動における「労働」概念の見直しは、フェミニズムと資本主義の関係、とりわけ資本主義批判の視点から登場した。しかし八〇年代以降、グローバルゼーションとともに進化した労働力の女性化の一方で、資本主義批判の視点は希薄化していったと言える。

本稿ではLFおよびSLD運動グループの一次資料（公表されたポスター、パンフレット、ちらし、資料等、および内部資料等）、ならびに活動が展開していた同時代のフェミニズム系の雑誌、書籍、研究書等における当グループおよび運動についての記述等を検討して、同時代におけるSLD運動の量的質的プレゼンスの再検討を行い、それとは不釣り合いな後年の歴史的記述におけるSLD運動に関する記述の乏しさの意味を考察する。

第一章では同時代の雑誌資料に現れるLFの活動情況を検討し、七〇年代におけるLFおよびSLD運動のプレゼンスの大きさを確認する。第二章では、LFおよびSLD運動に関する同時代資料に基づく文献や、運動内部資料を用いて、LFの運動体としての軌跡の記述を試みる。第三章では、七〇年代末〜八〇年代前半の雑誌、書籍、研究書等を検討し、LFおよびSLD運動をめぐる記述や議論を整理し、第四章において八〇年代以降「主流」とされるフェミニズムの特徴をSLD運動との対比によって明らかにすると共に、SLD運動の周辺化の意味を考察する。

第一章 同時代の雑誌におけるLFおよびSLD運動

すでに述べたように、LFおよびSLD運動は八〇年代末以降に本格化した七〇年代フェミニズム運動の歴史的記述において、無視されなければ、せいぜい列挙されるにとどまり、記述される場合には主流とされるフェミニズム運動の対抗的潮流として周辺に位置づけられている。しかし七〇年代当時の資料を検討すると、この潮流は、むしろ活発な活動と全国に広がる多くのグループ、さらに国際的な連携に特徴づけられる、メジャーな運動体であったことがわかる。本章では、七〇年代の代表的フェミニスト雑誌エッフェ (Effe) におけるLFおよびSLD運動のプレゼンスを検討し、さらに同時代のフェミニストによる解説書や論文におけるLFおよび家事労働賃金要求運動の姿を検討することによって、七〇年代当時のフェミニズム運動においてLFおよびSLD運動がその重要な一翼を担っていたことを確認したい。

エッフェ (Effe) は一九七三年から一九八三年まで月刊誌として刊行された、七〇年代イタリア・フェミニズム運動初の全国誌であり、代表的雑誌である。雑誌名称はイタリア語のアルファベットで「F」を指し、Feminismo (フェミニズム) の大文字のイニシャルがその名称の由来である。エッフェは、七〇年代を通じて刊行された自主運営によるフェミニスト誌⁷⁾としては唯一の存在であり、七〇年代フェミニズム運動の軌跡をもっとも忠実に反映する資料である。この雑誌は一般販売ルートで扱われ、新聞雑誌販売店舗や書店に並ぶ月刊誌として定期的に刊行された。イタリア各地に誕生した孤立した小グループをつなぐ役割をめざすと同時に、マスコミがまともに取りあげることがきわめて少なかったフェミニズム運動の情報を運動の外部へ、一般読者へと発信することも重要な目的であった。

一九七三年六月に出た創刊準備号(〇号)の表紙は大いに話題となった(図1)。毛皮をまとい胸をはだけ、ズボンをずりおろした男の写真を掲載した表紙の右下には次のような解説があった。「この男は誰だ? まったく誰でもない。グラビア雑誌の表紙に出ているセミヌードの女たちと

同じである。」この表紙写真は、雑誌の世界における性化された女性身体表象のパロディである。メディアにおける女性身体の見慣れた扱いを男性身体に適用するこの表紙は、女性身体へのまなざしを通じて男性中心の社会構造を効果的に暴くとともに、第二波フェミニズムの基本的な課題であった女性身体・セクシュアリティの支配抑圧搾取を挑発的に表していた。

一月月に刊行された第一号には作家ダーチャ・マライーニ (Dacia Maraini)、議会外左翼系新聞イル・マニフェスト (Il Manifesto) の編集者として著名なロッサーナ・ロッサンダ (Rossana Rossanda)、歴史学者フランカ・ピエローニ・ボルトロッティ (Franca Pieroni Bortolotti)、オーストラリアのフェミニストで『去勢された女』の著者ジャーメイン・グリア (Germaine Greer)、ら著名な文化人が執筆者として登場する一方、誌面の多くが各地の女性団体の投稿による運動情報提供に当てられた。小さな団体が無数に誕生していったこの時期のフェミニズム運動を外部に開き、運動情報を一般読者に伝える対抗情報 (controinformazione) の提供をめざし、かつ小グループ間の情報交流の場を提供した同誌は七〇年代フェミニズム運動の姿を、言わば実況レベルで忠実に伝えるメディアであり、今日貴重な歴史的資料である。第一号の論説には次のように雑誌の使命が述べられている。

私たちは自分自身で語り、証言し、思考し、闘いたい。それゆえ本紙は次の二つをめざしている。ひとつは女たちに「女の問題」を語る言葉を提供すること、すなわち女たちに自らの問題（本号ではたとえば中絶や個人的関係の中で女が男より晒されやすい身体的暴力などの諸問題）を一人称で語らせることである。もうひとつは女たちに可能な限りのあらゆる情報を、従来それらを歪めてきた視点を取り除いて、提供することである。(Effe n.1, 1973)



【図1】Effe 創刊準備号 (n.0,1973) 表紙

ここに示されるようにエツフェ誌は第二波フェミニズムの特徴である身体やセクシュアリティへの関心と「一人称による語り」を前面に掲げる雑誌であり、「個人的なこと」とされていた諸問題に言葉を与えることと並んで、女性問題や女性運動に関する直接的情報提供を目的としていた。こうした目的に沿って、誌面はおおむね編集部による特集記事、活動グループの投稿記事、活動グループ情報に三分されていた。

毎号巻末には運動グループの投稿による集会やデモなどの行動の告知や、フェミニストグループの名称・連絡先（住所、電話番号等）が掲載された。また地域におけるグループ結成の呼びかけメッセージもほぼ毎号登場した。第一号には四〇ほどの団体の連絡先が並び、その後、団体数は二〇〇を超えるまでに増えていった。そのため一九七六年以降は新しい団体情報と連絡先変更のみを毎号掲載とし、グループリストは隔月掲載となった。LFの各地のグループは第一号にすでに八団体（LFを名乗らないが関連グループの可能性をもつものも含めると九団体）が登場している。LFグループは、中心拠点であったバドヴァ、フェツラーラ、ミラノ、ボローニャ、モデナ、から、ヴェネツィア、メストレ、フィレンツェへと中北部に展開し、シチリアのジェーラにも存在した¹⁰。一九七四年一〇月のLF全国組織解散後はLFを名乗る団体をモデナなど一部に残しながら、「家事労働賃金要求委員会」等の名称により各地の活動は継続していった。誌上のグループリストにおいては、分裂後の一時期を除いて、恒常的に一〇団体前後を維持し、七〇年代後半には、ラヴェンナ、オルヴィエートなど、新たな都市に展開した。一九七六、七七年にはナポリ、ローマに相次いでSLDグループが結成され、リストに登場した。

一方LFの主要課題であった家事労働は、創刊当初よりエツフェ誌の主要なテーマのひとつであり、編集部による家事労働関係特集記事も充実していた。創刊準備号（〇号）にはフェミニストと反フェミニストの対立を、五つの主要課題にそくして解説する記事があるが、その課題には母性、中絶、離婚、結婚とならんで「主婦労働」(Lavoro casalingo)が挙げられており、反フェミニストの「女は炉端の天使であり家の女王である。彼女の行為は愛によって行われ苦痛は感じない」に対して「イタリア国家は家庭で掃除、料理、縫い物、老人・子ども・病人の世話を無償で行う女性のおかげで年間に二〇〇億リラは節約している」と主張する。雑誌編集部が家事労働問題を重要な課題として位置づけ、LFの見解を基本的に共有していたことがわかる (Effe n.0, 1973: 8)。

編集部はまた、家事労働問題についての特集を一九七四年三号、六号の二号にわたって組んでおり、当時のフェミニズム運動においてSLD運動のインパクトは大きかったことがうかがえる¹²。三号は一四―二二ページ、六号も三四―三八ページと、多くの誌面を割き、いずれもイラストやマンガ、フォトロマンゾ¹³などの画像を駆使した魅力的な誌面となっている (図2、3、4)。一九七四年三号の特集は、「女はだれもが

無償で家事労働を行っている。」¹⁴というLFの主張の紹介に始まり、エツフェ編集者やローマのフェミニストたちの座談会が掲載されている。¹⁵六号はLFの主張とともに、見解を異にする他のLFグループ、社会党女性部、共産党系女性団体UDI（イタリア女性連合）¹⁶の見解を集めている。

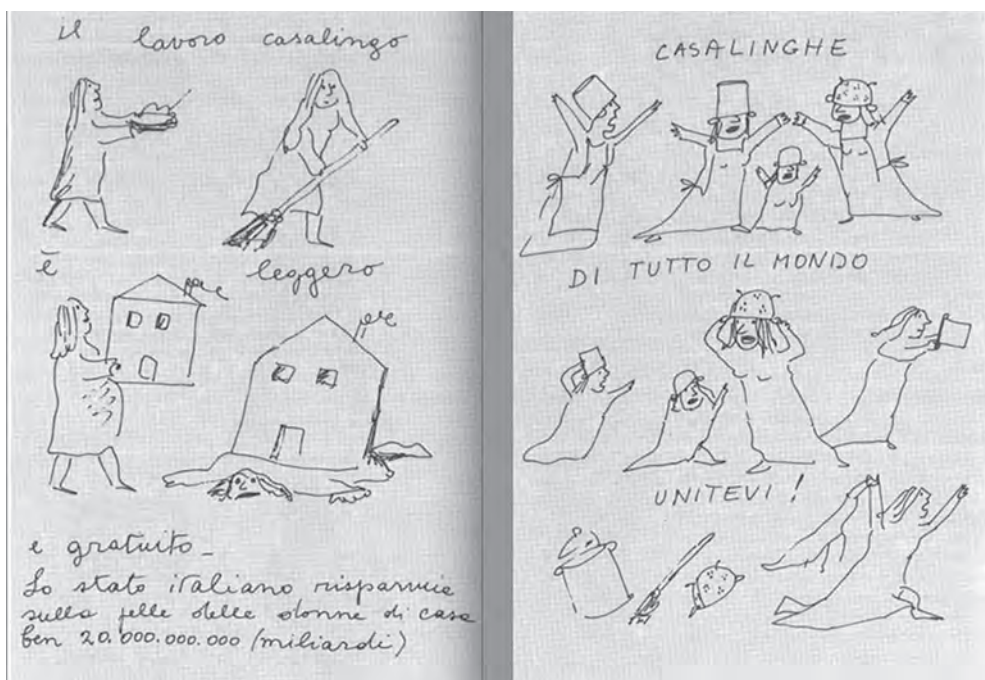
ここで引用されるLFの主張は、この運動の特徴を簡潔に示している。上記の文は次のように続く。「……主婦も、外で働く女も、内職をする女も、売春を余儀なくされる女も、幼女も、若い女も、老女も。私たちは国家が私たちに支払うことを要求しよう。これ以上無償で働く奴隷のように扱われるのではなく、各自の家で労働する女性として扱われることを要求しよう」(Il Volantone 1973)。ここでは「働く女」と「主婦」、「カタギの女」と「売春婦」、そして「若い女」と「年老いた女」という、伝統的に女性を対立させてきた代表的な分断線が列挙され、無償の家事労働は、その共通の基盤として位置づけられている。家事は労働であり、この労働を担う者はすべて労働者であり、その対価を要求する権利があることが主張され、賃金支払い要求は国家に向けられている。

三号の座談会の参加者はすべて個人名で参加し、個人として発言している (Effe 1974 n.3:14)。¹⁷ここでの主要な論点は(一)家の外で「働く」ことは女性解放の前提か。(二)家事は労働なのか役割なのか。(三)賃金は誰が払うのか。「雇用主」は夫か、夫の会社か、国家か？(四)家事労働は労働力を生産するのか、使用価値を生産するのか、等である。八名の参加者の間で意見は多様である。議会外左翼紙イル・マニフェスト編集者のリディア・メナパーチェ (Lidia Menapace) や共産主義フェミニスト・コレクティヴ (Collettivo femminista comunista) のルチアナ・デイ・レツロ (Luciana Di Lello) のようなマルクス主義の立場が鮮明な参加者は、家事労働の生産物は使用価値であり賃金要求は誤りである、と主張する。他の参加者も総じて賃金要求という戦略には懐疑的もしくは否定的であるが、家事労働は労働力という交換価値を生産するというLFの主張には共感する声が多い。司会のアデーレ・カンブリアは議会外左翼の「万人への保障賃金」との共通性を指摘する。家事労働賃金要求は、多くの女性の個人的生活実感のレベルで共感を呼ぶものであり、賃金要求が家事労働の搾取について認識を高め、それに対する怒りと抗議を促す政治的議論であるとするローマ・フェミニスト運動 (Movimento femminista romano) のロザルバ・ピステッリ (Rosalba Pistelli) の見解が議論を締めくくっている。

この議論からわかるのは、マルクス主義理論との距離がLFの主張への共感を左右していることである。共産党であれ議会外左翼（新左翼）であれ、マルクス主義者にとっては、家事労働は労働力商品という交換価値を生産するというLFの主張は受け入れがたいものであるが、新旧



【図2】主婦の1日を表現する fotogrmano (写真を用いたマンガ) Effe n.3 1974 : 17,19



【図3】「国家は200億リラを節約している」「全世界の主婦よ、団結せよ！」 Effe n.3 1974 : 20,21

左翼運動にそれほどコミットしていないフェミニストたちからはかなり共感されているということである。特集頁を飾るイラストやフォトモンズ等（図2、3、4）は家事が労働であることをユーモラスに、かつ説得的に示し、編集部がこの主張への支持が示唆されている。LFは活動当初より「マルクス主義フェミニスト」と自己定義していたが、LFの主張は七〇年代においてはマルクス主義者よりは、むしろフェミニストに理解され受容されていたと言えるのである。

一方六月号には、パドヴァLF第二グループ（ダラ・コスタのグループ）の「女にカネを」(Effe, 1974, n.6:34-35)、およびそれに対するペスカラのLFグループ (ibidem:36)、P S I（イタリア社会党）女性委員会 (ibidem:36)、およびU D I（イタリア女性連合）の見解 (ibidem:36-37) を掲載している。

「女にカネを」はこの時点での家事労働論の最新版として掲載された。この論考では家の外での労働、サービスの社会化、生殖やセクシュアリティなどの女性運動の課題のチェーンをつなぐ第一の輪として家事労働を挙げている。これらの課題は互いに関連しており、家事労働への賃金は、家の中でも外でも、食堂、保育所など社会的サービスの要求水準や、いつ何人子どもを持つか持たないか、あるいはいつどのように性交渉をするかしないかなどについて、女性が発言力や交渉力を獲得し強化するための「力の槌」となる、と述べる。ここでは労働概念は常識的な「家事労働」にとどまらず、性交渉や出産など、身体、セクシュアリティを含む概念へと拡張されている。

ペスカラのLFグループは賃金要求を主婦役割の脱神秘化としてのイデオロギー闘争として支持するが、経済主義的賃金要求については、それが実現しても資本主義的消費の拡大につながり、根本的な社会の変革には至らないのではないかと警鐘を鳴らしている。LFは家事労働賃金要求に関しては、一枚岩で同じ主張を同じ論調で繰り返していたと見なされがちであるが、これはLF関係グループの間での主張の多様性を示す記事である。

イタリア社会党 (P S I) 女性委員会代表のエンリーカ・ルカレリ (Enrica Lucarelli) は、家事労働問題は家族政策の充実によって解決すべきであり、すでに提出され、上院の通過待ちである家族法改正は財産共有などを通じて主婦の貢献を認めるものであるとし、賃金の支払いは女を家事労働に縛りつけてしまうと述べる。イタリア女性連合 (U D I) は、剰余価値などのマルクス主義の概念を用いたLFのS L D理論はマルクス主義理論とは認めがたい「いい加減なもの」であり、女性解放にとって有害であると断言し、賃金ではなく社会政策によるサービスの充実によって解決すべき問題であると述べる。

エッフェ編集部はLFによって喚起された活発な議論を歓迎し、イタリア社会党女性委員会とイタリア女性連合の見解について「フェミニズム運動の外部においては、このテーマは決定的に危険なものに見なされている」と論評している (Effe, 1974 n.6:34)。

フェミニズム運動と左翼運動の断絶、そして左翼運動によるSLD運動への強い批判は、LFやSLD運動団体が運動の当初から左翼運動から自立した組織であったことを裏付けている。「労働力商品の再生産労働」という家事労働の定義は、ネオマルクス主義も含めて強固なマルクス主義の伝統を土台とする運動理論からは到底認められるものではなかった。同時にエッフェ誌上での特集に見られるように、さまざま議論はありながらも、SLDはフェミニズム運動の中の重要な一翼であると見なされていたことは明白である。

この特集について、LFがエッフェ編集部に送った一九七四年六月二八日付けの抗議文がLFパドヴァ内部資料として残っている。一九七三年のクリスマスまでにと催促されて急いで原稿を送ったにもかかわらず、掲載が半年も後になり、しかも社会党や共産党の女性団体の見解と並んでいることに対しての激しい抗議が攻撃的、威圧的トーンで述べられている。このことはエッフェ編集部においてSLD運動についての評価が分かれており、バランスをとるために掲載が遅れた可能性を示しているようにも見える。実際三月号の座談会に参加したフェミニストたちは名前を出して一人称で語り合っているのに対して、LFの文書は顔の見えない組織名によるものであり、こうしたスタイルの違いは後にフェミニストの多くがSLD運動に距離をおくことになった要因のひとつであった。しかしこの時点では、すでに示唆したように、座談会での意見の相違は新左翼運動に参加するフェミニストたちとそれ以外のフェミニストたちの間に現れており、特集全体を通じて新旧左翼運動のSLDへの拒否反応は明らかであるが、フェミニストの中での対立は、少なくともエッフェ編集部所在地ローマでは、まだ顕在化していなかった。

エッフェ誌上にはLFおよびSLD関連記事は一九七三年〇号から毎号ほぼコンスタントに登場し、七四〜七五年のゆるやかなピーク、および七七年のピークを経て急減していった(図5)。SLD関連団体の記事には編集部の記事や依頼記事も存在するが、やはり運動体からの寄稿が



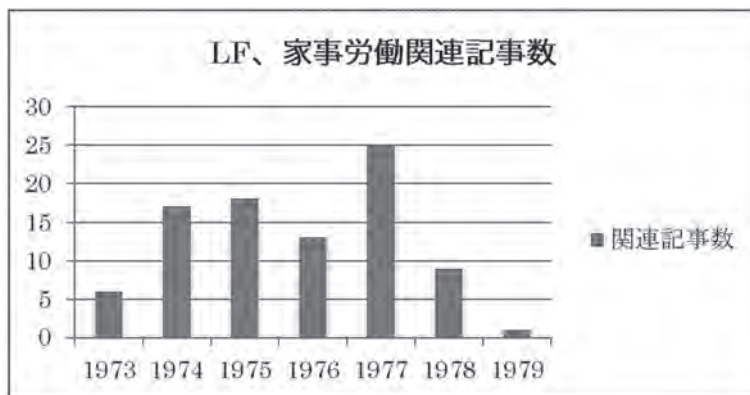
【図4】 Effe n.6 1974: 38

多くを占める。七〇年代半ば過ぎまでは、パドヴァやフェッラーラなどLF本拠地のグループからの投稿が主であったが、七七年以降はローマにできたSLD委員会による記事がほとんどである。一九七四年一〇月のLFの全国組織としての解散は、SLD運動を挫折させるどころか、SLDに特化した運動はさらに活性化していった。これはSLD運動の勢いの推移とともに、イタリアにおける七〇年代フェミニズム運動全体の動向とも一致している。七〇年代後半期の七六〜七七年は最大の政治的争点であった中絶の権利を求める運動の高揚期であったが、この時期SLD運動は「再生産労働」概念の拡大によって理論的にも実践的にもリプロダクティヴ・ヘルス・ライツやセクシュアリティをめぐる課題に取り組み、セックスワーク、同性愛、性暴力問題にもコミットしていった。²¹⁾ SLD運動は七〇年代フェミニズムの政治運動を牽引する主要グループのひとつとして活動し、フェミニズムにとつての政治的季節の終焉とともに、フェミニズムの表舞台から姿を消したと言えるのである。

エッフェ誌にかぎらず、七〇年代フェミニズム運動の同時代の記録におけるLFおよびSLD運動のプレゼンスは高い。一九七八年に刊行された「七〇年代イタリア・フェミニズム年鑑」²²⁾において、LF、SLD運動の存在感は際立っている(図6、7)。関連頁数は記事一六八頁中一八頁と、一割以上を占め、巻末グループリストの中に、SLDを名称に掲げるグループは、この時点(一九七七年)で、まだ全国に一五団体存在していた。²³⁾

一九九七年に開催されたフェミニズム運動ポスター展のカタログ *Riguardarsi* (1997) においても七〇年代のポスターにはLF、SLD運動によるものが多くを占めており(図8、9、10)、七〇年代については二六枚中七枚、四分の一以上がLF、SLD運動のポスターである。

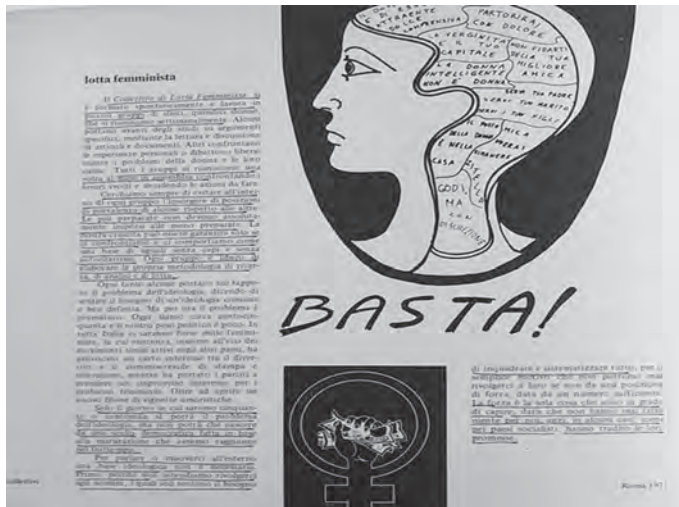
このプレゼンスの高さの一因は、SLD運動の方法がメディアを駆使して運動と無縁の層への浸透を図るものであり、出版など直接的なプロパガンダ活動だけでなく、さまざまな媒体への積極的



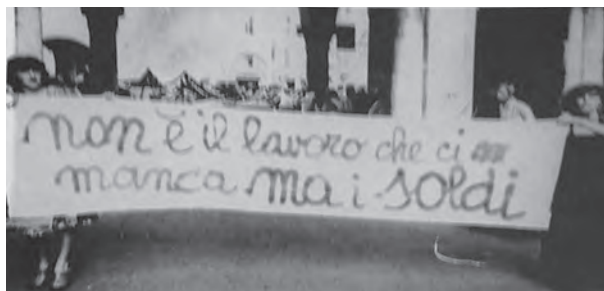
【図5】エッフェ誌上LF およびSLD 運動関連記事数の推移 (1973～1979) 筆者作成

な登場を目指したことによるものと思われる。「編集部と異なる意見の団体の投稿も掲載する」という立場から、グループからの投稿をできるだけ掲載する方針を維持してきたエツフェは、SLD運動にはかなりの誌面を提供したが、エツフェに限らず、多様な団体の投稿をできるだけ掲載するという姿勢は七〇年代の多くのフェミニストの媒体に共通のものであった。七〇年代イタリア・フェミニズム運動の代表的雑誌としてエツフェとともに挙げられる、ミラノで発行された雑誌ソットソブラ *Sottosopra* (1973~1976) や、ミラノのグループ、アナバジ (L'Anabasi) が一九七二年に刊行した *Donne e bello* 「女であることは美しい」の意) はアメリカのフェミニスト・グループの多くの文献の紹介を含めたフェミニズム運動の総合誌というべき書であったが、いずれにおいてもLF、SLD運動グループのプレゼンスは際立っている。

Donne e bello は、多くがアメリカの運動や理論を伝える記事で構成され、とくに小グループによるコンシャスネス・レイジングの紹介はイ



【図6】L'AlmanaccoのLFの頁 紙幣を握る拳はSLD運動のシンボルマークであった。「Basta!」は「もうたくさんだ!」の意。



【図7】LFのローマ集会 (1973.1.19) の横断幕 「私たちに不足しているのは仕事ではなくカネだ」と書かれている。

タリアの運動に大きな影響を与えるが、ここでも家事労働をめぐる議論のプレゼンスも相当に大きく、家事労働関連記事は総頁九六頁中二五頁におよぶ。ソットソプラ誌を編集発行していたミラノのフェミニスト・グループは、後にミラノの女の本屋を設立し今日まで活動を継続しているが、後年七〇年の運動を振り返る論集を刊行し、その中で、第二号刊行時に生じた、創刊時のすべての投稿を掲載するという方針をめぐる議論について次のように述べる。

一九七四年に第二号が出たが、*Sottosopra* の機能についての議論が持ち上がった。冒頭にLFの署名による、主婦への賃金要求で有名な記事が出ていた。……編集、印刷等すべての作業を担う者に、編集の権限もないのだろうか? ……長く、古くさい文体による、同じテーマについての繰り返しが多い記事は誌面を退屈にする。これはおそらくは独自のメディアを持ちながら似たような内容の長い記事を送って来るLFのことを示唆していた (*Libreria delle donne di Milano* 1987: 37-38)。

冒頭でも述べたように、今日のイタリアのフェミニズムにおいては、LFやSLD運動は無視、等閑視されがちな傾向にあるが、その背景には七〇年代当時からすでに形成されていた根深い対立が存在し、その一因が、たとえば他の雑誌媒体を積極的に利用するLFの戦略的行動が引き起こしていた反発にあったことがわかる。だが、LF、SLD運動への明確な批判の言説は、



【図8】1973年国際女性デーのポスター



【図9】1974年国際女性デーのポスター (メストレ)

八〇年代末期にはすでに少なくなっていた。そしてその後九〇年代以降の七〇年代フェミニズム史構築において、言及自体がタブーであるかのように触れられなくなっていく、七〇年代フェミニズムの歴史研究における無視もしくは周辺化へと至るのである。

このように、イタリアの七〇年代フェミニズム運動におけるLF、SLD運動は、同時代のフェミニスト系メディアや文献において、無視できないどころか、当初からフェミニズム運動の中で重要なアクターであったことがわかる。次章ではLF結成時からのLF、SLD運動の軌跡を辿りながら、七〇年代フェミニズム史構築の背景を、とくにフェミニズム運動内での摩擦の要因となった運動スタイルを中心に検討する。

第二章 LF、SLD運動とその背景

既に述べたように、九〇年代以降七〇年代フェミニズム運動に関する歴史研究が蓄積されていったが、LF、SLD運動を本格的に取りあげた研究は今日にいたるまでほとんど存在しない。例外的にLF、SLD運動についての詳細な記述を行っているのが九〇年代後半に書かれたZunagino (1996) および Zanetti (1998) であり、これらは七〇年代フェミニズム史構築の動向において逸脱的位置にあると言える。いずれも七〇年代フェミニズムの活動を担い、その後運動当事者として七〇年代フェミニズム資料収集活動を行った者によって書かれ、豊富な一次資料や聞き取りによって構成されている点も共通している。これら当事者の記述からは、雑誌やポスター、ちらしなどの一般の人々に向けられた資料には現れにくい組織のあり方や運動スタイルなどフェミニズム運動内部の実情や課題が具体的に見えてくるのである。



【図10】1975年メーデーのイベントポスター（フィレンツェ）

〈LF、SLD運動の軌跡〉

まず七〇年代におけるこの運動の経緯を上述の Zanetti (1998) を参照しながら概観する。著者アンナ・マリア・ザネッティ (Anna Maria Zanetti) は七〇年代パドヴァでLFに参加し、その後はジャーナリストとして活動している。同書はLF、SLD運動の拠点であったパドヴァやヴェネツィアを含むヴェネト州における七〇年代フェミニズム運動を当事者の視点から記述した、今のところ唯一の文献であり、それによれば七〇年代のヴェネトのフェミニズム運動はほとんどLFおよびSLD運動から派生しているという。他のグループ同様、LFもまた分裂を重ね、多様な運動を送り出してきた。著者はLF内に生じた激しい対立にはあまり踏み込まず、運動内の多様な動きを比較的偏りのない等距離的視点で描いている。ローカルな運動の記録であるが、LFおよびSLD運動のイタリアおよび国際的広がりについては必然的に触れられている。同書掲載のLFおよびSLD等関連グループの運動史年表には、パドヴァが全国的行動の中心になった出来事がいくつか挙げられている (Zanetti 1998:209-214)。とくに重要なのは、一九七三年に中絶の罪で起訴された女性ジリオラ・ピエロボン (Ghiglia Pierobon) の裁判支援闘争である⁽²⁶⁾。政治の季節であった七〇年代を通じて中絶と女性の自己決定権はイタリア・フェミニズム運動の最重要課題であった。LFおよびSLD運動は労働力再生産労働の搾取を拒否し、自らの身体とセクシュアリティの決定権を要求する立場から中絶問題をはじめ、女性の健康や医療問題に先進的に取り組んでいた⁽²⁷⁾。またパドヴァのグループがローマやナポリでも活動し、国際的連携を推進してきたことにより、七〇年代後半期にイタリア中南部でのSLD要求運動が活性化したことも記されている。

一方一九七六年にはダラ・コスタをゼミから排除したアントニオ・ネグリ (Antonio Negri) への学生や教員による抗議行動が生じたように、新左翼運動との対立が生じていた。LFはすでに結成の翌年一九七二年に、ローマでの女性だけのセミナー開催時に新左翼グループの男たちから襲撃されている。しかし対立だけではなく、一九七六年以降には自由ラジオの活動やデモにおける男性の協力など、協働関係もあった。

一九七六年の総選挙における議会外左翼勢力の敗北と、その後のいわゆる「鉛の時代」と呼ばれた左翼テロ活動の活発化、一九七八年のモロ事件によって新左翼運動は壊滅していくことになる。フェミニズム運動もまた、同じ時期に政治的季節の終焉を迎えた、とされている。

七〇年代末以降のフェミニズムは、運動資料アーカイブ構築や女の家、女の本屋のような女の拠点作りへの転換を経て八〇年代以降は主に文化運動としての新たな展開を見ることになる。しかしSLD運動はZanetti (1998) の年表が唐突に終了しているように、八〇年代へと転換することができなかった。パドヴァの運動資料館 (CDD) はいち早く一九七五年に開館したが、七八年には閉館し、大部分の資料をミラノの

Badaracco 資料館の前身であった CSSLMIDI⁽²⁹⁾に寄贈した。八〇年代後半以降のフェミニズム運動史におけるプレゼンスの希薄さの要因として、まず第一にこの点が挙げられるであろう。つまり、パドヴァ、ヴェネツィア、フェッラーラ⁽³⁰⁾等 LF および SL D 運動の拠点であった地域の運動は総じて政治の季節に政治運動として展開し、その終焉を越えられず、八〇年代以降の文化活動への転換による運動の継続ができなかった。そして七〇年代フェミニズムについての歴史認識は、この八〇年代以降の文化運動が構築していったのである。

Zunagino (1996) は当時の関係者の豊富な証言に基づいて、トリノを中心に七〇年代フェミニズム運動の経緯を詳細に辿った著作である。著者ピエラ・ズマッリーノ (Piera Zunagino)⁽³¹⁾はトリノで活動した著名なフェミニストである。同書出版を前に逝去したが、活動をともしてきたメンバーたちによって刊行に至った。トリノには LF の周辺の関係者は存在していたが、支部結成にはいたらなかった。にもかかわらず、七〇年代初期の運動形成期にはミラノやローマを中心とする都市間の交流は活発に行われ、とくにミラノとトリノのフェミニズム運動には人的交流と強い協力関係があった。本書は七〇年代初めの頃の様々なフェミニストグループが形成されていく具体的プロセスを、比較的距離を保った視点から記述しているが、ここではやはり LF の動向が形成期において強力なイニシアティブを發揮しつつ、摩擦を起こしてもいたことが示唆されている。トリノは労働運動や新左翼学生運動の拠点都市のひとつであり、同書はトリノを中心に北イタリアにおけるフェミニズムの生成と新左翼運動との関わりを当事者の証言から具体的に記述している。家事労働賃金要求という戦略的スローガンは、新旧左翼に忌み嫌われたが、しかしその主張はベーシック・インカムに通じる市民賃金の要求や、労働の拒否など、七〇年代新左翼運動の理論と戦略の上に位置づけられるものでもあった。以下では Zunagino (1996) におけるさまざまな証言を通して LF 登場の経緯を、その母体となった Potere Operaio (ポテーレ・オペライオ「労働者の力」の意・以下 P O)⁽³²⁾との関係、およびセルマ・ジェイムズに代表されるイギリスの Power of Women Collective との関わりから検討し、それらを踏まえて運動スタイルの特徴を見ていく。

〈労働者主義 (operaiamo) を背景とした LF の登場〉

イタリアでは一九六五年に結成された先駆的グループ Demau (Demistificazione autoritarismo 「権威主義の脱神秘化」)、およびラディカル党 (Partito radicale)⁽³³⁾の女性組織として一九六九年に全国規模で結成された M L D (Movimento di liberazione della donna 「女性解放運動」) を例外として、多数の女性の小グループが登場したのが一九七〇年から七一年にかけてであり、LF もまたそのひとつであった。他のグループ

と少し異なっていたのが、LFはバドヴァをはじめ、ヴェネツィア、フェツラーラ、ミラノ、ジェーラ、ボローニャ、フィレンツェなど、イタリア各地にほぼ同じ頃に同名のグループが結成されたことである。LFは一九七〇年九月ごろにPOの女性メンバーが主力となって立ち上げたフェミニストグループである。当初の名称は *Movimento di Lotta Femminile* (女の闘争) であったが、ほどなくロッタ・フェミニスタ (*Lotta Femminista* 「フェミニスト闘争」) と名称変更した。この名称はマリアローザ・ダラ・コスタによって考え出されたという証言がある (Zunaglino 1996:105-106)。⁸⁴ それによると、*Lotta* (闘争) という左翼運動の伝統的用語と、カトリック女性やブルジョワ女性に適合的な *femminile* (女性的) という形容詞とは対照的で政治的主張を鮮明にする語である *feminista* を結びつける、という意図であったとされている。ここにはすでにマルクス主義の世界観による「労働」中心的な社会運動観とフェミニズムの主張とを統合しようとする意図が明確に示されていた。事実LFは当初より「マルクス主義フェミニスト」と名乗り、マルクス主義との理論的連続性を明確に主張している (*Lotta Femminista*, 1972)。ただしその内容は伝統的マルクス主義の立場からは到底認めがたいものであった。すでに述べたエックフェ誌上のイタリア社会党女性委員会やイタリア共産党系のイタリア女性連合の見解に見られるように、伝統的左翼の激しい批判は、マルクス主義の労働概念を家事労働に適用する理論を「異端視」するものであったと言える。しかしそうした批判は旧左翼に限らなかった。LFの家事労働賃金要求や女性のストライキ戦術は、PO等イタリア新左翼運動の労働者主義 (オペライズモ) の「社会的工場」概念によって労働や労働者の概念を狭い意味でのプロレタリアートから失業者も含む生活者全体に拡大する理論の影響を強く受けていた。しかし強力な労働運動の伝統を持つイタリアはきわめて権威主義的、すなわち男性中心的な労働者中心主義を土台としており、そのラディカルな拡大を促してきた新左翼運動においても、それを越えるには至らなかった。LFを含むフェミニストの分離主義は階級を分断するものとして新旧左翼の強い反発を引き起こした。

それはたとえばメーデーへのフェミニストの参加に対する冷笑的で拒絶的な対応に典型的に示されている。これはLFの事例ではないが、一九七二年のメーデーにトリノのフェミニストたちが参加したときの様子が参加者たちによって証言されている。フェミニストグループが「女として」メーデーの隊列に参加することがいかに「想定外の」「勇気ある」行動であったかを、以下のような証言が伝えている。

私たちは次のようなビラを用意した。「私たちは多数だ。女たちよ、孤立から出よう。どんな家も閉じた家だ。・・・労働予備軍として、また台所の召使いとして。一緒に闘おう。鎖を打ち砕こう。・・・」また「女であることは美しい」という大きなプラカードも作成した。・・・

私たちはヴィットリオ広場の左のつきあたりに集合した。．．．しかし私たちの参加は認められなかったもので、私たちは隊列に無理矢理入り込んだ。．．．

．．．広場にいる人々の大部分がどうして女が労働者の隊列に女として参加したいのか理解できなかっただろうが、私たちはピラをまき、すべての女が、そして主婦も、働いているが、支払われないだけなのだと説明した。もちろんこれでは周囲の参加者の意地悪や皮肉から防衛するには十分ではなかった。．．．

．．．ロッタ・コンティヌア *Lotta Continua* (以下LC)³⁵の男たちが集まって嘲笑していた。侮辱されるより悪かった。するとLCの女性メンバーが近づいて来て、私に「あなたたち勇気があるわね!」と言った。彼女はそれを私の耳元で、誰にも聞こえないように言ったのだ。

(Zumaglinio 1996:138-139)

もちろん女性の姿がメーデーの隊列になかったわけではないが、それは労働組合に参加する「女性労働者」として、あるいは新左翼グループの女性メンバーとしての参加であり、労働者の隊列にフェミニストグループとしての参加はありえなかった。伝統左翼は言うまでもないが、労働者概念を大きく拡大させた新左翼の労働者主義といっても、実態はせいぜい失業者(男)どまりであり、市場労働中心主義と男性中心主義の限界は越えられていなかったのである。

POの影響下から出発したLFであったが、POとの亀裂が鮮明になるのに時間はかからなかった。一九七二年七月、LFはローマで女性労働に関するセミナーを開催する。それは女性のみが参加できるセミナーであり、LFもまた分離主義の実践という第二波フェミニズムの特徴を備えていたのである。ところが、男性排除に腹を立てたPOや他の運動体の男性メンバーたちが窓ガラスを割って会場を襲撃するという事件が起こり、LFはマニフェスト II Manifesto³⁶、LC³⁶そしてPOに、抗議文を送付し、この抗議文の機関誌上への公開と各団体の見解を要求する(*Lotta Feminista*, 1972)³⁷。

ローマ大学教育学部において、LFは「女性の雇用」について女性限定セミナーを開催していた。女性グループの組織的必要性もあり、かつフェミニズム運動全体としての必要性からも女性限定とした。曖昧に「同志」と自己定義する男たちは、女たちが自律的に自らの搾取と

闘争の形態を決定しようとすることに我慢がならず、セミナーの進行を物理的に妨害した。……

資本主義は家父長制による男性優位を取り入れ、機能させたが、「革命的組織」も資本主義から男性支配を取り入れている。これらすべてが、階級を分断させてきた。……

今日、家族、工場、学校、そして「革命的組織」において、女性の搾取と抑圧の維持によって、身体的精神的に作用するテロ行為によって押し付けられる男性支配を受け入れる女は、もはやいない。

私たちは女だけで組織する。なぜならそれが有益であり安全だからだ。私たちの搾取との闘いの形態は私たちが自分で決める。

これが、ドアを突き破り、私たちに水をいれたコンドームを投げつけ、窓ガラスを割り、私たちを殴り、傷つける理由であるなら、私たちは七月七日に教育学部で生じたと同じ方法でやり返すだろう。
(Lotta Feminista 1972:11-12)

この抗議文に示されるように、この事件は、新左翼男性メンバーによるフェミニストの分離主義行動に対する性的侮辱を含んだ暴力的介入である。II Manifesto は七月一日、LCは七月一五日付で各媒体に、POは七月二〇日のII Manifesto の投稿欄にそれぞれの見解を掲載した。いずれもとりあえずはこの事件に対して遺憾の意を表明し、女性問題への認識と取り組みの不足を認めている。しかしII Manifesto とLCは、フェミニストの主張の多くについては同意できないとし、男性を排除した女性限定の集会は、「重要ではない」と付言し、暴力的介入に「階級的観点から」理解を示している (Lotta Feminista 1972:12-14)。以下に特徴的な箇所を挙げる。

私たちはフェミニズム運動の主張の多くに同意しないし、「男性の」介入を厳格に遮断した「単性の」集会で長話することを政治的に重要であるとは思わない。……彼らが「階級的」批判をこのように表明してしまっただとすれば……(七月一日付II Manifesto)

……フェミニズム運動の立場は、われわれは到底共有できないが……(七月一五日付 Lotta Continua)

さらに七月二一日にLC機関誌に掲載された投稿記事はむしろ暴力行為を正当化し差別的侮辱行為を重ねるようなものであった。男性に発言

させないことを非難し、LFのメンバーは「男はみんな去勢してやる」とか、「男はブルジョワジーで女がプロレタリアートだ」と言っている、という類いの「噂」を取りあげて、LFは典型的なブルジョワであり、共産主義とは全く異なるとし、さらには「女だけの快樂」「人口生殖」をめざすような理論であるとの暴言を披露している (Lotta Feminista 1972 :15-16)。この揶揄や侮辱を伴う投稿が女性メンバー二名と男性メンバー二名の署名によって「人民に力を」というスローガンとともにLC誌上に公表されていることは、とりあえずは表明された遺憾の意に反して、これがLCの本音の主張であるようにも見える。⁽³⁹⁾

POはLFの賃金要求に理解を示し、女性問題に真摯に取り組みべきであると述べている。LFの理論に多少とも言及しているのはPOの投稿のみである。ただそれは「salario garantito a tutti 万人への保障賃金」としてであり、「家事労働」に言及することはない。またPOの投稿はII Manifesto に対する批判にも力点が置かれ、II Manifesto はPOに対する嫌みのコメントを添えて掲載するという、本来の問題を放置した非難の応酬が展開している (ibidem: 13-15)。

イタリアに限らないが、フェミニズムは、保守勢力からは言うまでもなく、七〇年代の「革命的左翼」を自認していた層による無理解、曲解、反感、そして明らかに差別意識と悪意に囲まれていた。LCはイタリアの代表的な議会外左翼グループであり、多くの女性も参加していたが、こうした記事を見る限りにおいて、階級概念の男性における拡大と過激で暴力的な言動を除けば、伝統的な運動との違いはとくに見当たらないと言える。第二波フェミニズムはこうした逆境の中で運動と理論を構築したのであり、この環境がフェミニズムそのもののあり方に影響したことは確実であろう。⁽⁴⁰⁾

△国際的連帯…セルマ・ジェイムズとPower of Women Collective▽

ズマツリーノは、ダラ・コスタ、ジェイムズとミラノやトリノのフェミニスト・グループの接点となったアトリアーナ・ペッロッタ・ラビッツシの証言により、その交流を記している。

その日彼女(ダラ・コスタ)は私に、フェミニズムはブルジョワ的であるというこの歴史に終止符を打とう、と言い、セルマ・ジェイムズの話をした。ジェイムズは私の家に泊まり、講演を行った。その講演を私たちは *Colloquio con Selma James dello Workshop inglese* (イ

ギリスのワークシヨップにおけるセルマ・ジェイムズとの対話」というタイトルで翻訳・印刷した。それは後に出版されるダラ・コスタの有名な *Potere femminile e sovversione sociale* (『女の力と社会の転覆』⁽¹¹⁾) を着想させたテーマの草稿だった」(Zunaglino, 1996: 106)

この時期イタリアのフェミニズム運動におけるセルマ・ジェイムズの影響力は、関係者の語りや当時のチラシ、パンフ等一次資料に顕著に現れている。今日七〇年代フェミニズム運動史において言及されることが極端に乏しいSLD運動が稀に固有名詞によって代表されるとき、挙げられるのはセルマ・ジェイムズの名前であり、彼女の名は *Effe* 誌や *Sottosopra* 誌をはじめ、七〇年代の一次資料に頻繁に出現する⁽¹²⁾。家事労働論はイタリアのフェミニストたちにとっては、まずはアングロサクソンの国からやってきた「舶来」理論だったのである。ジェイムズは70年代に何度もイタリアを訪れ、各地で講演を行った。LFに限らず、この時期の様々なグループのチラシや内部資料にはセルマの名前、およびそのワークシヨップ等についての情報が頻繁に登場する。

セルマ・ジェイムズはアメリカ生まれの黒人社会運動家であり、すでに一九五三年には家事労働論の基本となる論文「女性の地位」を書いていた⁽¹³⁾。七〇年代はロンドンで *Power of women Collective* の活動に携わっており、LFはこのイギリスのフェミニスト団体と協働関係にあった。ジェイムズによるダラ・コスタ (Dalla Costa 1972) の迅速な英訳は同年のうちにプリストルで出版され、イギリスを中心とした英語圏における、いわゆる家事労働論争の口火を切ることになった。ジェイムズと *Power of Women Collective* もまた社会主義理論を背景としたグループであり、家事労働論争は基本的にマルクス主義経済学者の間で展開した。

Power of Women Collective の主張は、「女性も男性も、雇用者も失業者も、既婚者もそうでないものも保障される所得」⁽¹⁴⁾ “reddito garantito a tutti, donne, e uomini, occupati e disoccupati, sposati e non” (Zunaglino 1996: 105) であり、POの「保障賃金」やベーシック・インカムと同様の構想であった。「家事労働への賃金」がこの文脈において要求されていることは、ダラ・コスタ (Dalla Costa 1972) と共通である⁽¹⁵⁾。

このようにLFはイタリアにおける出自、および国際的な連携という、二重の意味において、マルクス主義理論の枠組みを土台とした運動体として登場し、マルクス主義フェミニストと名乗った。しかし、マルクス主義の伝統から逸脱した概念の使用と再定義が、マルクス主義者からは、言わば異端視され、批判と忌避を招いたと言える。

一方、一九七〇〜七一年に雨後の筍のように誕生していった多様なフェミニスト・グループの中で、このマルクス主義のフレームを強固に保

持したフェミニスト運動体はどのような位置にあり、他団体とどのような関係にあったのだろうか。

〱七〇年代イタリア・フェミニズム運動の中のLFV

一九七〇～七一年にかけて、多くのフェミニスト・グループが登場した。ズマツリーノは、この生成期におけるLFの立ち上がりを詳細に記録している(Zunagino 1996)¹⁵。一九七〇年のイタリア各地での代表的グループの登場に続いて、一九七二年にPOの女性たちが中北部のいくつかの主要都市、およびシチリアにグループを結成したことを記している(Zunagino 1996:102)¹⁷。イタリア・フェミニズム運動は各都市を拠点とした運動体の地域的活動が多く、LFのように同じ名称で全国各地に展開した組織はきわめて例外的であった¹⁸。これは他団体からLFを区別する特徴のひとつである¹⁹。

この時期にグループ間のインフォーマルな連携が形成されていった。一九七一年二月にローマでMLDの集会が開かれ、その時点ではまだフェミニストグループは互いに孤立していた。しかし四ヶ月後の六月末にミラノに集まったとき、すでに状況は変化し、連携の構築によってフェミニズム運動という大きなうねりを創り出していく気運が生じていた(Zunagino 1996:104)²⁰。このミラノ集会に向けた数回の会議には、LFを結成することになるPO関係の女たちが多数参加していた。彼女らは各地にグループを結成しながら、すでに結成当初から、ネットワーク形成による運動の拡大を志向する特徴を備えていた。LFという同名のグループとしての各地での支部形成に加えて、当初よりイギリスのPower of Women Collective等との国際的なネットワークを備えていた。イタリア・フェミニズム運動生成期において、LFは自らのイニシアティブによるネットワーク形成をめざして積極的に動いた。上述の一九七一年六月末のミラノでの集会はDenauとCollettivo Milaneseの二団体よる呼びかけであったが、運営はLFによって主導された。

このような立ち上げ当初のLFの組織的動きは、やはりPOのサポート抜きには不可能であっただろう。ラビッシはきわめて具体的にPOの男性メンバーの関係について証言している。彼女の夫はPOの活動家であり、POの男性メンバーからの情報によってミラノの女性たちはパドヴァのフェミニストの動きを知ることとなった。こうして彼女はマリアローザ・ダラ・コスタと知り合うことになった。

ズマツリーノが示唆するのは、二月のローマでのMLD大会後の活発な動きのなかでイニシアティブをとったLFへの、他のグループからの違和感である。

それは使用言語、集会運営方法、「男」の介在という、相互に関連した三点に集約される。LFが用いた“Politichese”（「政治語」という造語。政治的ジャーゴン）は、POをはじめとする新左翼運動と共通のものであった。「集会運営方法も、まさに新左翼運動における「男のしきり」をそのまま受け継いでおり、プログラムに従って次々に報告が行われ、他の者はそれをただ聞く、という方法で進行した。また、POの男性メンバーの同席もまた他のグループの女たちが違和感を感じる一因であったと思われる（Zunagino 1986:108）¹¹⁾。

これらはいずれも二月のローマでのMLD集会に対する違和感と共通のものである。フェミニストグループが一堂に会したのはこれが初めてであったが、自由な開かれた討論は行われず、予め予定されていた報告が延々と続くという「権威主義的な（autoritario）」運営方法であった。参加者の中に代表的分離主義フェミニスト・グループのRivolta Femminileと男性の参加を認めるFILF（Fronte Italiano Liberazione Femminile）、トレント大学の女子学生グループ、その他議会外左翼グループの女性メンバーたちが参加していたが、とくに男性の運営への介入が、女性の従属が維持されているように見え、違和感を感じるという意見が多く出された。Rivolta Femminileのメンバーが順番通りの報告の中断と男性の会場からの排除を要求したが、ラディカル党の指導部はきわめて官僚的に対応した。フェミニストグループは二日目の午後独自に集合し意見交換を行うこととなった。しかし六月のミラノの集会や、それに先立って開催された会議においても、内容はともかく、言葉や運営スタイルは似通っていた。「一九七一年春にはまだ一人称単数による自己表現、自分自身や具体的な自分の経験から始める発言の習慣からは遠い状況であった」とズマッリーノは述べている（ibidem:108）。

後述するが、ズマッリーノはLFの運動への貢献を高く評価し、トリノの運動にとっても大きな意味があったと述べている。男たちは保育を担当し、それはうまく機能したという（ibidem:108-109）。その一方、運動スタイルにおいて多くの参加者が感じた違和感についても指摘する。それは堅苦しい政治的ジャーゴンと、それに適的な運営への反発であった。ラビツシの証言によると、報告者と聴衆が分離した伝統的左翼スタイルの集会運営に反発したL'Anabasiのセレーナ・カスターデイが報告の途中で立ち上がり、このような伝統的政治スタイルの会合に同席するのは気がすまないと宣言し、同じ意見の者はいくると言って、中庭へ出て行った。その時はだれも彼女についていかなかったが、カスターデイの行動は参加者に影響を与えた。トリノからのある参加者は、帰宅後ただちにカスターデイに手紙を書き、彼女のグループで同様の疑問を感じていることを訴え、カスターデイは長い返事を送った。このやりとりは翌一九七二年二月にL'Anabasiの機関誌アル・フェミニーレ（Al Femminile）に掲載され、さらには一九七三年にミラノで刊行されたソットソプラ（Sottosopra）創刊号に掲載された。

ここで明確化した対立は、男性的運動スタイルの踏襲をめぐるものであると同時に、政治運動としての拡大をめざすか、あるいは個々の女性の内面や関係性を見直していくコンシャスネス・レイジング (autocoscienza) か、という路線の対立として、以後先鋭化していくことになった。ザネッティもまた、同じ問題に言及している。このヴェネトの運動に特化した、LFに共感的立場からの記述もまた、女性資料センター(CDD)に関連して、同様の見解を述べているZanetti (1998)。

一九七五年にセンター(女性資料センター)が開館したとき、パドヴァにはたくさんのグループがあったが、それらはいずれもLFから派生した、非常に政治的なグループで、互いに対立していた。

こうした状況で、新たなグループはそれとは異なることを表現しようとした。グループのメンバーは皆左翼であったが、みながマルクス主義を身につけていたわけではなく、—他のパドヴァのグループとは異なり—みなが広場での行動や「政治路線」の起草をめざしていたのでもなかった。彼女らは当時用いられていたスローガンや政治的ジャーゴンではなく、政治的ではない女も含めて、どんな女も理解できる、シンプルで明快な言語を用いた。

彼女らは「小さなグループ un piccolo gruppo」と名乗った。共に過^ごし働くことを選択したからである。垂直的組織を拒否し、「新しい相互関係を実践し、女の真のアイデンティティの回復をめざし、自らの私的な領域を政治的に分析」した。「小さなグループ (piccolo gruppo)」と^{ごう}表現はミラノやローマのグループが用いていたが、パドヴァの活動家は^けっして用いることはなく、むしろ警戒していた。

(Zanetti 1998:152)

ここに示されるのは、新左翼運動と対立しながら、その運動スタイルは継承し、運動の拡大による政治的変革を求める路線と、個人的問題から女性という主体の形成へと向かう新しい運動スタイルを模索、実践する路線の間の対立である。すでにローマやミラノ、そしてトリノでは新しいフェミニズム運動の生成期から存在するこの対立は、LFの最大の拠点であるパドヴァにおいては、LFの分裂を経た七五年の段階でようやく表面化したのである。

しかしこの矛盾にもっとも苦しんだグループは、ミラノのLFであろう。ミラノはL'Anabasiのように、LFとの路線対立が当初から顕著な

グループが有力であった。その対立は、感情的亀裂と拒否感に達しており、今日に引きずるほどに根深い。⁽¹³⁾一因はミラノが、L'Anabasiのような、コンシヤスネス・レイジング (autocoscienza) の実践を行うグループが優勢な地域であるとともに、LFの重要な活動拠点のひとつでもあり、対立の痛苦を経験してきたフェミニストがもつとも多いことにあるのではないだろうか。LFの機関誌の印刷はミラノで行われ、当時は先進的なビデオ作品「私たちは疲れている。私たちは女。私たちはもうたくさんだ! (Siamo stanche, siamo donne, siamo stufo!)」も一九七四年にミラノで作成された(図11)。多くの重要な集会はミラノで開催された。地方主義の強いイタリアで例外的な全国展開を志向していたLFにとって、ミラノは中北部における最重要拠点であったと言える。

LFミラノのメンバーの苦悩は、当事者の語りからミラノのフェミニズム運動史の再構成をめざしたCarabro & Grasso (1985) にも登場する。女たちの集まる場として共同利用していたケルビーニ通りの家で、LFの女たちは肩身の狭い思いをしていた。そして彼女ら自身にもLFの組織運営への不満が存在していた。ミラノのLFにはLFが全体としてけっして取り組むことのなかったコンシヤスネス・レイジング (autocoscienza) の実践を行う二つのグループがあった。このグループの一九七四年一月一日付内部資料には、次のような疑問や不満が並んでいる。

- ・与えられた政治プロジェクトの存在とそれに対する同意が当然視され、家事労働賃金要求のような課題について、十分議論されることはなかった。
 - ・疑問は私的会話でしか表明されなかった。
 - ・autocoscienza によって、互いの違いが顕在化し、「均質性」神話は崩れた。「Tutte tutte assieme (女たちみんなが一緒に)」という神話の崩壊・集団性とは、違いを認めた上で弁証法的に到達すべきものである。
- (Due gruppi di autocoscienza 1.1.1974 in Archivio Percovich, Fondazione Badaracco)

セルマ・ジェイムズはたびたびイタリアを訪れ、各地で講演やワークショップを行った。彼女の講演やワークショップは小冊子として印刷され多くのグループで読まれた。それによると、ジェイムズはLFの運動スタイルの問題点をよく理解していたように見える。

ジェイムズの講演は、多くのイタリアのフェミニストたちがアレルギーを感じていた、いわゆる左翼用語や、政治的ジャーゴンをみじんも含

まない平易な説得力のある表現で語られている。そしてそこには重要な指摘がある。

ジェイムズはLFがタブー視していたコンシャスネス・レイジング (autoscienza)⁵⁴ や「小さなグループ」の重要性を語り、それがLFには欠けていたことを指摘している。またとくに興味深いことに、ジェイムズは中産階級の女の運動に、たとえば黒人女性労働者のグループが参加するかといえば、やはりしないだろうと述べている。彼女らは階級の内部で、しかし自立した組織を作ることになる、というのである。そしてそれぞれの課題を確認し、その交差する領域として家事労働を位置づけている。ジェイムズはまさしく実践家としてのマルクス主義フェミニストであり、そのための理論を構築した運動家であったと言える。実際イタリアにおけるジェイムズの評価はLFと対立していたフェミニストたちも含めて、きわめて高く好意的なものであった。⁵⁵ しかし外国のマルクス主義者として受容されたジェイムズの存在は、後年構築されていくイタリア・フェミニズム運動史に位置づけられることはなかった。

Zunagino (1996) は、九〇年代以降にLFの運動について批判と同時に積極的な評価を述べている、ほとんど唯一の文献である。イタリアにおけるSLD要求運動が、セルマ・ジェイムズの影響の下に形成されたことを示唆しながら、この運動について、以下のように述べている。

LFによる家事労働の強調は、この運動の主要な歴史的功績である。なぜなら、イタリアのフェミニズム運動がもつぱら「進んだ」⁵⁶ 女の運動になってしまふことなく、潜在的にはすべての女の運動となることを助けたからである。事実LFの分析は、主婦の労働の中に、女の経験を統合する要因を見だし、賃金をもらうことなく、彼女を「扶養する」労働の供給者である夫に個人的依存関係によって縛り付けられる専業主婦の状況に、すべての女に適用されるに至る、地位低下の原因を見いだすからである (Zunagino 1996: p.109)。

そして、「この運動はトリノのようにSLDを共有することのなかった都市にも大きな足跡を残した」と述べ、LFの運動がSLDから、身体、健康、セクシュアリティの課題に及び、とくにパドヴァにおいて優れた実践を行ってきたことを評価している。

パドヴァのLFは、とくにこの(家事労働賃金要求の…筆者)取り組みで知られているが、セクシュアリティや避妊について優れた実践を行い、一九七四年には(イタリアで)初めてフェミニストの自主運営による優れた相談所を開設した。(Zunagino 1996:p.109)

同じ一九七四年には、すでにLFの内部対立が激化し、同年一〇月六日にLFは全国組織としての活動に終止符を打つことになる。LFの解散は、一九七四年一〇月六日にパドヴァで開催された連絡会議で決定された。この決定をめぐっては、各支部における様々な内部文書が残っており、LFが多くの矛盾を抱えていたことがわかる。こうした内部文書には一方の主張のみが述べられており、感情的な記述と思えるものも散見され、評価の難しい面があるが、何が主要な対立点であったかについて公式見解からは知ることのできない実情を示している。対立点は世代間対立、autocoscienza についての見解の相違、活動スタイルの相違等が挙げられるが、これらは相互に密接に関連している。とくに活動スタイルについては「リーダーシップ」が深刻な対立点となっており、イギリスの Power of Women Collective の中でもイタリアのグループ間の対立について議論されたことを報告するイギリスのメンバーの手紙（イタリア語）が存在する（Fondazione Badaracco, Archivio del femminismo: Busta 73 fascicolo8）。

Autocoscienza とは、グループ構成員間のヒエラルキー形成を防ぎ、だれもが発言できる場を保障する機会を提供するものでもあった。しかしLFにおいては、autocoscienza は「ブルジョワ的個人主義の実践」とみなされ、その語自体がタブーにさえなっていた。組織内における自由な議論と民主的決定プロセスがLFには欠けていたとする指摘は多い。先述のジェイムズの講演の中での autocoscienza についての発言は、こうしたLF内部の不満に配慮して述べられたものではないかと思われる。

全国組織としてのLFの解散に先立って、一九七四年初頭には既にパドヴァとヴェネツィアのLFは第一グループと第二グループに分裂していた。

第一グループは同年末には Centro Femminista へと名称変更し、地域での地道な活動を目指した。家事労働賃金要求というLFの中心的課題は維持しながら、それに限らず幅広い地域での政治活動に取り組んだ。Le indomabili bisbetiche（「馴らされないじゃじゃ馬」の意）は、女性の健康と医療、物価など地域の生活の政治的分析、女性の集まる場の要求などを掲載し、地域のカウンター情報誌として広く読まれた（Zanetti 1988: 125）。このグループは自立した女の組織を維持しながら、広く政治や行政に関与していった。そして多くのフェミニストグループが政治活動から距離をとることに批判的であった。

ダラ・コスタが主導する第二グループは男性の運動とは異なる方法での幅広い戦略を目指した。第一グループのような地域、保育所などでの活動はエネルギーを短期間に消耗してしまおうとし、フェミニズムの情報と無縁な女性たちを巻き込む女性のゼネラル・ストライキの創出を目標

としていた。そのためにマスメディアの利用や直接一般の主婦に届くコミュニケーションツールの創出を考案した。運動ビラは家庭で孤立する主婦にはなかなか届かない。一般の女性たちにアピールする新聞、本、演劇、歌、といった手段の獲得のためにグループメンバーは会議でのスピーチ、新聞作成、ビラやポスターの文章を作成する等の技術を学んだ。実際ユニークなデザインのポスター、当時は珍しい動画、それに歌とレコードの制作、演劇等のパフォーマンスなど、七〇年代フェミニズムのユニークな財産の多くはこのグループによって創り出されたと言っても過言ではない(図11、12)。

LF全国組織の分裂、解散後、SLD運動はむしろ活発化していった。パドヴァ第二グループを中心としたトリヴェネト家事労働賃金要求委員会を立ち上げ、国際的な運動に積極的に参加していった。イタリア国内ではナポリやローマなど、南部において活動が活性化した。一九七六年が運動の頂点であった、とザネットイは述べている(Zanetti 1998)。セルマ・ジェイムズやアメリカ在住でニューヨークの家事労働賃金要求グループのメンバーであったシルヴィア・フエデリーチがナポリやローマで講演やワークショップを行ったのもこの年であった。

SLD運動は、家事労働論を再生産労働として再定義することによって、リプロダクティブ・ヘルス・ライツやセクシュアリティ、セックスワークなどへと労働概念を拡大させ、政治実践としてもこうした課題に取り組んで行った。中でも中絶の権利要求運動についてはパドヴァのピエロボン裁判支援闘争などに七〇年代前半から積極的に取り組んだ。

一九七六年以降新左翼ラディカリズムが急速に衰退する中、七〇年代フェミニズム運動の最大の政治課題であった中絶法が一九七八年に成立し、フェミニズムの「政治的季節」は終了したとの認識が広がった(Zanacan 2003)。フェミニズムが資料館や女



【図11】SLD キャンペーンビデオ



【図12】レコード「闘う女の歌」(L'Almanacco, 1978: 145)

の本屋、女の家のような「拠点づくり」など文化運動中心の活動へと変化していく中、SLD運動は急速に消滅していった。⁽⁵⁸⁾ 一方七〇年代末には家事労働論をめぐる学術的議論が登場した。次節ではこの運動末期の家事労働論からイタリア・フェミニズムの転換期におけるSLD運動の位置づけを検討する。

第三章 フェミニズム運動転換期における家事労働論

七〇年代後半期、「政治の時代」終焉の気配が濃くなる時期に、七〇年代の運動をめぐる理論的な検証の議論が盛んになっていく。中でも中心的テーマは家事労働賃金要求運動であり、家事労働について、また賃金要求という戦略について、理論的側面からの考察や研究が登場する。一九七七年にはBimbi (a cura di), *Dentro lo specchio*, 一九七八年には家事労働や権力などのキーワード、キー概念についての批判的考察を含むFraire (a cura di) (1978 = 2002)⁽⁵⁹⁾、一九七九年にはChiste' (et al.), *Oltre il lavoro domestico*といった、家事労働についての学術研究文献が登場する。視点は必ずしも経済学的なものではなく、むしろ文化的政治的なアプローチが主流である。⁽⁶⁰⁾ *Dalla parte della donna* (1971)の著者であり、イタリアで初めての女性学セミナーをトレント大学で開講した社会学者キアラ・サラチェーノ (Chiara Saraceno)の家事に関する調査に基づく共編著 *Il lavoro mal diviso* (1980)は、家事労働論の経済的側面から性別役割分業の不平等問題へと焦点を移し、家族社会的役割論へと問題構成を変化させた。経済学的議論はイタリアではほとんど展開せず、学術雑誌DFWを媒体としての英語圏における家事労働論争の翻訳紹介に終始している。⁽⁶¹⁾

イタリアでの家族社会学の発展に貢献したサラチェーノやフランカ・ビンビ (Franca Bimbi)は、家事労働をめぐる七〇年代の議論を役割論として展開し、労働の定義をめぐる経済学的議論からの分離を進めたと言える。

Bimbi (a cura di), *Dentro lo specchio* (1977)は、一九七五年にパドヴァ大学でビンビが主催したセミナーをまとめた著書である。上述のサラチェーノや、LFのメンバーで後年イタリア文学者として活躍するマリナー・ザンカン (Marina Zancan)の論考も収録されている。ビンビの意図は七〇年代のLFおよびSLD運動を含めたフェミニズム運動の視点からのアカデミズムの批判的再構築をめざす女性学の試みであった。ビンビ自身の論考は「家族社会学と女性役割のイデオロギー」と題し、彼女自身が参加していたLFの理論から、経済学における労働力再生産

の無視を指摘し、アカデミズム全体における女性の不可視性を告発している。そして何より家事労働の生産性が無視されていることを限界として告発する (Bimbi:29)。しかしそこには「家の(女性)労働者 (Operai della casa)」というSLD運動の語は登場するが (bimbi:31)、家事労働の収奪や拒否は登場しても、賃金要求という運動戦略について触れられることはない。ザンカンの論考「家事労働―すべての私たちの病 (Lavoro domestico: la malattia di tutte)」は、家事労働関係と女性の身体的精神的抑圧から中絶を含むリプロダクティブヘルス問題への展開を辿っているが、そこで展開されるのはまさしくLFおよびSLDの運動理論および実践に他ならない。

しかし本書の議論がLFおよびSLDの文献資料と何よりも異なる点がある。それは政治語からの脱却である。政治の季節の終焉という社会の変化も反映されていたであろうが、何よりも同書は大学で開催されたセミナーの記録であり、家事労働論が運動の言葉から、それを踏まえた研究の言説として変貌したことは注目すべきであろう。この環境において、労働論と身体論の連続性は言語化され記録されたのである。しかしこの時期、すでに「労働」と「身体」の再分裂は始まっていた。パドヴァの女性医療センターの分裂は「身体」を「労働」に従属させ、政治闘争に位置づける理論と「身体」の問題そのものに取り組む方針との対立によるものであった。ザンカンの論考は、明言は避けつつも、自身も巻き込まれたこの路線対立を記述的に解説し、この分裂を表面化させることなく、対立と分裂が始まった地点を示している。

サラチェーノの編著 *Il lavoro mal diviso* (不均衡な分業) (一九八〇) は、タイトルが示すとおり、分業の偏りを主要な論点とし性別役割分業の問題として家事労働を論じている。サラチェーノは同書において家事労働 (Lavoro domestico) と区別して「家族労働 (Lavoro familiare)」の語を用い、さらには「労働」と「ケア」を区別して、Lavoro e cure familiari (家族労働とケア) を用いている。サラチェーノは「家族労働」を「家の内外で家族のために同じ家族の成員によって遂行されるすべての労働であり、賃金や所得を得る活動を除く」と定義している (Saraceno 1980:3, 36-37)。「家族成員間の関係のための情緒的配慮も含めている点が家事労働とは異なる」としており (ibidem:3)、ケア役割を含むさらなる概念の拡大を主張する。一方サラチェーノはすでに一九七一年に出版されたトレント大学のセミナーをまとめた *Dalla parte della donna* (女性の立場から) の中で、家事労働への賃金は性別役割の固定化につながるとして反対の立場を表明しており (Balsano 1998:90)。¹⁾ この労働概念の拡大がケア役割の評価への展開には結びつかない。その意味ではサラチェーノの議論は、パーソンズの性別役割論に示される表出的役割を労働に含めつつも、結局は同書のタイトルが示すように労働論から役割論へと比重を移したと言える。

八〇年代に入り、七〇年代の政治運動は文化運動へと大きく転換しようとしていた。Dal movimento femminista al femminismo diffuso「フェ

ミニズム運動からフェミニズム思想の広がりへ」(Carabro & Grasso 1985) に示される変化は、政治運動としてのフェミニズムの衰退であると同時に、文化運動としての新しい形態の運動を出現させることになるが、そこにはもはや「身体」と連続した課題としての労働論のプレゼンスは希薄である。

八〇年代に政治課題が消滅したわけではない。新左翼ラディカリズムがすでにその勢いを失っていたこの時期、中絶法をめぐる国民投票(一九八二)をめぐるフェミニズム運動は活発な動きを見せていた。同年に生じたイタリア女性連合(UDE)のイタリア共産党からの独立は、女性運動の新旧左翼運動からの自立を象徴する出来事であった。しかしこの時期すでにSLD運動はフェミニズム運動の中に登場することはなかった。イタリアでは七〇年代以降、共産党や社会党などの伝統的左翼政党もドラスティックな再編を行い、今はもう存在しない。

フェミニズムはそうした政治変動とは一線を画し、女性学、女性の拠点作り、女の本屋、資料館とネットワーク構築など、独自の運動を展開していった。中でもフェミニズム運動の足跡を歴史として継承しようとする動きは八〇年代に広がっていく。八〇年代前半には批判的な議論を中心にLFおよびSLDへの言及は記述されるが、その後八〇年代後半以降「歴史」として登場する七〇年代フェミニズム運動史には、SLD運動についての記述はほぼ消滅するのである。⁶⁴

しかしLF、SLD運動は多くの人材を輩出した。八〇年代以降の新たな展開を担うフェミニストの中には、フランカ・ビンビ、マリーナ・ザンカン、アリーザ・デル・レ (Alisa Del Re)、ルチアーナ・ペルコーヴィッチ、アントネッラ・ピッキオ (Antonella Picchio) ら、LF、SLD運動の経験者が少なくない。しかし彼女らのこの運動についての歴史的位置付けと評価についての発言は、Picchio (2009) を例外として今のところ存在しない。

次章では、八〇年代後半以降に「歴史」として登場する「主流」とされるフェミニズムの特徴をSLD運動との対比によって明らかにすると共に、SLD運動の周辺化の意味を考察する。

第四章 七〇年代フェミニズム運動史による「フェミニズム」構築

今日七〇年代フェミニズム研究をめざす者に推薦される代表的な入門文献として必ず挙げられるのは、七〇年代フェミニズム運動を特集した

雑誌メモリア (*Memoria rivista di storia delle donne*) nn.19-20 合併号 (一九八七) である。女性史の専門誌として一九八一年に創刊された、「記憶」を意味するメモリア誌は、この時期に開始されたフェミニストの歴史構築運動を牽引してきた貴重な媒体であり、「七〇年代フェミニズム運動」を特集タイトルとする本号は、「このテーマとこの時代に近づきたいと思う者にとつて今なお欠くことができない」(Guerra 2004) とされる文献である。だが、一九八七年のこの特集号に、新左翼運動とフェミニズムの関係や、左翼運動とフェミニズム運動への二重の参加 (*doppia militanza*) を担うフェミニストの困難を論じる論考は存在するが (Gramaglia 1987, Zuffa 1987) 、LF やSLD 運動への言及は皆無である。

この特集にも参加している政治学者ヤスミン・エルガス (Yasmine Ergas) は早くから七〇年代フェミニズムを論じているが、この論考だけでなく、以前に書かれた論文や著作においてもSLD 運動についてはまったく触れられていない (Ergas 1982, 1986)。

一方八〇年代に書かれた文献の中には、LF の動向、および家事労働賃金要求運動にそれなりにページを割いて論じているものも存在する。それらは上記メモリア誌特集号より以前に刊行され、七〇年代の運動の記憶の生々しさを感じさせる文献である。代表的なものは、このテーマでは必ずといっていいほど引用される先駆的基本文献である A.R. Calabro & L. Grasso (1985) *Dal movimento femminista al femminismo diffuso* (「フェミニスト運動からフェミニズムの広がりへ」) である。これは六〇〜八〇年代のミラノにおける女性運動の動向を、当時の資料と当事者の証言に基づいて再構成した著作である。バタラッコ資料館の前身であるイタリア女性解放運動史研究センター (CSSMLD) の企画による同書は七〇年代フェミニズム研究の初期の代表的文献として高く評価され、後年の七〇年代フェミニズム研究においては必ず参照される文献である。サブタイトル「ミラノにおける六〇・八〇年代の歴史と歩み」に示されるように、イタリアの地域主義的運動展開を反映して、ここではミラノに限定した整理、分析が行われているが、ミラノだけでも数多く存在した多様なグループを整理するために、本書が採用した枠組みは、その後の研究枠組みの土台として踏襲されていくことになる。それは *autocoscienza* (コンシャスネス・レイジング) を基本にした内省的意識変革運動グループと、政治課題に向けて行動を組織していく社会的実践グループという二つのカテゴリへの分類である (Calabro & Grasso 1985, : 31-33)。両者には少なからぬ重なりもあり、社会的実践グループにおいても *autocoscienza* の実践が行われてきたし、内省的運動グループも政治行動には参加してきた。しかし本書の枠組みは、運動の志向性において対照的な二つの潮流があったとして、両者の対立構造を定式化している。興味深いことに、この記述において、前者に属するグループは *Rivolta Femminile* (ミラノ) 、*Cercchio spezzato di Trento* (トレント) 、*L'Anabasi* (ミラノ) といったグループ名が挙げられているが、後者についてはここでは具体的な名称は挙げられていない。そして新しいフェミニ

ニズムの傾向は、匿名の後者との対比によって特徴づけられている。

小グループによる内省的運動という第二波フェミニズム運動の特徴的スタイルは、政治的課題を設定して大衆を組織化し、その組織を拡大していくという新旧左翼の伝統的な運動スタイルへの批判と、そこからの差別化によって定義づけられていた。そして後者は明らかに、女性の課題を周辺化し排除してきた家父長的で男権的な運動スタイルとして位置づけられており、前者こそが新しいフェミニズムの本来的スタイルであるという暗黙の前提は、後者との差別化に依存して成立していたとも言えるのである。ここでは、*autocoscienza* の実践に批判的であり政治運動を志向するLFは暗黙裡に後者と同一視されることによって、「フェミニズム」の正統性を担保する役割を担わされていると言える。

七〇年代の政治運動の記憶がまだ生々しかった八〇年代の文献では、否定的な文脈ではあれLFとSLD運動は無視されることはなかったが、一九八七年のメモリア誌特集号以降、急速に豊富化していった七〇年代フェミニズム研究文献において、このLFの不在あるいは追加的言及への限定傾向は明確化していったように見える。

ルイザ・パッセリーニ (Luisa Passerini) の『女性とフェミニズムの歴史』(一九九一)は、オーラルヒストリーの手法を用いて七〇年代フェミニズムの歴史の再構成を試みた画期的研究であるが、「イタリアの新しいフェミニズム (neofemminismo) は、ラディカル・フェミニズムと定義できるだろう」(Passerini 1991:177-178)と述べ、具体的には七〇年代前半期の「Rivoluzione Femminile, フランスの「精神分析と政治」グループと連携したミラノとトリノのいくつかのグループ、そして様々な都市のグループや個人」と特定している。そしてこの潮流と同時代に「交流あるいは対立」していた潮流として、MLDおよびLFを挙げている。A.R. Carabro & L. Grasso (1985)に加えて、同書に示された七〇年代フェミニズムの定義がその後の研究状況に与えた影響は決定的であり、基本的にこの枠組みが継承されながら、「交流あるいは対立」の部分においてのみLFへの言及がされてきたと言える。つまりMLDという政党に所属していたグループと列挙されるLFは、やはりフェミニズム「本流」からは排除されつつ「本流」をその「異質性」において定義する存在とされてきたのである。

二〇〇〇年代に入って、こうした傾向はさらに継続している。イタリア女性歴史家学会 (Società italiana delle storiche) が二〇〇五年に出版した Bertolotti & Scattigno 編, *Il femminismo degli anni Settanta* (「七〇年代フェミニズム」)にはパッセリーニ、エルダ・グエッラ (Elda Guerra)、アンナ・ロッシ・ドリッア (Anna Rossi-Doria)ら九〇年代からの代表的研究者の論考が収録されているが、ここでのLFおよびSLD運動への言及は極度に限定的である。LF関連の言及は、LFが四回、セルマ・ジェイムズが三回あるのみで、ダラ・コスタへの言及はゼロ

である。SLDを名称に掲げる諸団体にもまったく言及されていない。

七〇年代フェミニズムの入門書として、すでに述べたZunagino (1996)と同様にトリノで編集された「七〇年代フェミニズムを論じる一〇〇冊の読書案内」Riberò&Vighiani (a cura di); *Cento titoli*, (1998)は、五六名の執筆者によって七〇年代フェミニズム関係の一〇〇冊の文献を紹介・解説する、七〇年代フェミニズム研究の基本文献のひとつである。一〇〇冊の中には、LFに関する四つの文献が選択されている。ダラ・コスタの「女性の力と社会の転覆」、LFの機関誌*L'Offensiva*、さらに家事労働賃金要求を掲げて国際的に活動を展開したフェミニスト国際コレクティヴの二冊の刊行物である。⁶⁷一〇〇冊の中には七〇年代フェミニズムの著名な英語文献も含まれていることを考えると、一〇〇冊中四冊という割合は、決して低いとは言えない。トリノで出版された本書ではLFおよびSLD運動は比較的评价の対象として位置付けられていると言える。そしてここでは次のような重要な「違い」が指摘されている。

L'Offensiva で用いられる言語はフェミニズム運動のもっと典型的な言語と比べて明らかに異なる。それは「書き言葉」の傾向が強い文体で、そこでは主語はほとんどづねに三人称であり、さらにはしばしば「資本」のように抽象化されている。この文体は、また、(訳注・集会記録集である) *L'Offensiva* の基になった集会在伝統的な方法で組織されていたことを反映している。(ここでの方法のように) 発言が予定され、発表者は聴衆の前で話す、という進め方は、後年完全に崩れていく。(Schiavon 1998)

「フェミニズム運動のもっと典型的な言語」とは、*autocoscienza* に典型的にあらわれる一人称としての女である。第二波フェミニズムの特徴とされる「女性という主体」がそこから自らを差別化した伝統的言語に、LFの言語は位置づけられている。言語的にはLFは男性新左翼運動に分類され、新しいフェミニズムはそこからの差別化によって定義されている。さらにスキアヴォンは、LFの全国的展開、政治課題優先の大衆運動のスタイル、そしてプロパガンダへの情熱などの特徴は、いずれも新左翼ラディカルズムと酷似しており、使用される語彙や表現もまた同様であった、とも述べている (Schiavon 1998)。

このように、七〇年代イタリア・フェミニズム史において、LF、SLD運動については言及されることすら乏しく困難であるという状況の背景には、七〇年代イタリア・フェミニズム史が「政治運動」との対立によって構築されてきたという、単なる人間関係的な確執を超えた構造⁶⁸

的要因の存在が推察されるのである。七〇年代当時には、様々な対立や摩擦がありながらも、LF、SLD運動はフェミニズムの中に位置づけられていた。このことは同時代のフェミニスト誌エツフェや一次資料によって構成される文献においては明らかである。しかし八〇年代以降のアーカイブ構築と歴史研究の中で、主流のフェミニズムはLF、SL運動のスタイルではないものとして構築され、LF、SLD運動は語られないことよって七〇年代フェミニズムの歴史的有り様を支える存在となってしまったのではないだろうか。以上をふまえて、最後にこうした状況よってフェミニズムが直面するいくつかの課題について考察したい。

おわりに 七〇年代フェミニズムの構築が排除したもの

ここまで見て来たように、七〇年代イタリア・フェミニズムの理論と運動には、いくつもの対立と分裂に示される多様性、複数性が存在したが、七〇年代末から八〇年代以降のフェミニスト・アーカイブ構築運動を経て、七〇年代フェミニズム運動は、*autocoscienza*（コンシャスネス・レイジング運動）を中心に、それとは異なる運動スタイル、とりわけLFおよびSLD運動との差別化よって、定義され構築されてきたのではないかと思われる。

このことは、七〇年代フェミニズム運動の内部に混沌とした状態ながら存在していた身体、生殖、セクシュアリティの視点からの「労働」概念の問い直しの気運を、結局は頓挫させてしまうことになったのではないだろうか。

国際社会においては「労働」概念の見直しは、アンペイド・ワークの測定・評価の課題や社会政策の変革、ワーク・ライフ・バランスなどの政策への動きとして展開し、デーセント・ワークの提唱など「(市場内)労働」のあり方を問い直す契機となってきた⁶⁹⁾。しかしイタリア国内において、こうした国際社会における家事労働賃金要求運動のインパクトは今日に至るまでほとんど顧みられることなく、むしろ新たに外部から入って来た課題として受容されているのが現状である。近年イタリアでもさかんに議論されているワーク・ライフ・バランスのような課題について、七〇年代イタリアの家事労働をめぐる運動の問題提起と関連づける議論はほとんどとされていない⁷⁰⁾。

一九八三年にズマッリーノらトリノのフェミニストは *Produrre e riprodurre*（生産と再生産）と題する国際会議を開催し、「労働」をめぐるフェミニズムの議論を包括しようと試みた⁷¹⁾。雇用労働、自営労働などとともに主婦労働を位置づけ、社会的サービスを公的サービスだけでなく私的サー

ビスを含めたものとして定義し、さらに生殖やセクシュアリティを、この「労働」をテーマとする会議に位置づけていること等に、その後フェミニズム運動の中でも希薄化していった七〇年代フェミニズム運動のひとつの志向性を、いまだ同時代のものとして活き活きと伝えているように思える。しかし既にLFおよびSLD運動への直接的な言及はそこには存在しない。タイトルが示すように生産「production」と生殖「reproduction」を「reproduction」は、七〇年代フェミニズムを経て、再び分離しているように見える。

イタリアのフェミニストたちのアーカイブ構築の努力によって各地に整理保存されている七〇年代の一次資料からは、再構築された七〇年代フェミニズム史における周辺化にもかかわらず、LF、SLD運動の質的量的存在感の大きさを知ることができる。しかしSLD運動との差別化において歴史的に定義されることによって、イタリアの七〇年代フェミニズム運動史は、労働概念の見直しと変更への国際的気運に大きく貢献したその一翼を結果として排除してしまった。イタリア語では歴史と物語は同じ語 *storia* であることに端的に示されるように、歴史とは事実の客観的記述ではなく、どのような歴史認識を構成するかはまさに政治的闘争そのものである。女性史研究の造語である *her story* は、男性中心の正史への批判であるだけでなく、歴史が物語 *story* として構築されることをも表している。本稿は近い過去である七〇年代フェミニズムの歴史構築によって周辺化されたSLD運動の足跡を同時代資料によって明らかにすることを試みた。国際的にはアンペイド・ワークやケア労働の評価、労働力の女性化、有償家事労働の拡大などの中、フェミニスト経済学的发展などにおいて、七〇年代フェミニズムにおける新しい労働論の萌芽は継承発展していると言えるが、七〇年代の特色であった女性身体、セクシュアリティをめぐる政治課題と労働の統合は、今日なお困難な状況にある。グローバル資本主義が再生産領域に注目する今日、資本主義批判のフェミニズム運動としてのSLD運動の歴史的評価はイタリアにとどまらない、フェミニズムの今後につながる課題である。

注

(1) カトリック国イタリアでは離婚が制度的に可能になったのは一九七〇年のことであり、その後一九七四年には離婚法廃止を求める国民投票（戦後第二回目）が実施されたが、離婚法は支持された。家族法の改正（一九七五）でようやく夫婦平等原則が確立した。先進的な内容を含んだ雇用機会均等法は一九七七年に成立した。中絶は他の国々同様、もっとも激しい争点となった政治課題であったが、一九七八年に一定の条件下での中絶を認める法律が成立し、一九八二年国民投票によって、あらためて支持されるに至った。名誉犯罪（家族の名誉を傷つける性的な「逸脱」行為に対する殺人などの犯罪）の情状酌量措置が廃止されたのは一九八二年になってのことであった。

(2) セルマ・ジェイムズの一九五三年に書かれた論文 *Il posto della donna*（女性の地位）が共に収録されている。

- (3) 邦訳「女性のパワーと社会の変革」(一九八〇)はセルマ・ジェイムズの翻訳による英語版からの重訳である。この論文については筆者によるレビュー論文も参照されたい(伊田二〇一〇)。
- (4) ナイロビ会議に参加したジャーナリストの座談会で、NHK記者、羽太宣博がジェイムズのグループのロビー活動を報告している(あごら104号1986:140-141)。
- (5) 日本女性学会二〇〇九年大会シンポジウム「日本女性学会設立三〇周年記念特別企画・今ジェンダーの視点で問い直す貧困と労働」では、シンポジスト全員から日本の女性学において労働問題への取組みが不足しているという批判がなされた。
- (6) 一九七二年にはCollectivo Internazionale Feminista (フェミニスト国際コレクティブ)がパドヴァで結成され、家事労働賃金要求運動はイギリス、カナダ、アメリカ、フランスなどに展開した。同時期には日本においても飯島愛子「女にとって搾取とは何か」(一九七二)、竹中恵美子編著『現代の婦人問題』(一九七二)など、家事労働論が輩出した。日本ではすでに一九六〇年に磯野富士子が先駆的問題提起を行っていた(磯野一九六〇、一九六二)。
- (7) 政党その他の団体の援助を受けることなく主に購読料によって運営されたため、常に経営上の困難を伴っていたが、だからこそ離婚、中絶など政治課題が満載の七〇年代を通じて、政治的配慮に振り回されることなく、女性の立場からの自由な発信を継続することができた。創刊前に交渉していたミラノのフランコアンジェリ社の運営協力が結局得られず、パリーのデタロ社のサポートによって出発した。それが終了した一九七五年以降は、読者の購読料のみによって運営された。
- (8) 七〇年代前半期に編集責任者であったアデーレ・カンブリア(Adele Cambria)によれば、*Effe*誌がもともとプレゼンスを高めたのは家族法改正(一九七五)、男女雇用機会均等法成立(一九七七)、中絶法成立(一九七八)といった重要課題が目白押しであった一九七六年から七八年という、フェミニズム運動の政治的高揚期であったという。このことは、運動の伴走者としての同誌の位置を示している(Cambria 1998)。
- (9) 当初*Effe*は週刊の新聞をめざしていたため、*Giornale*(新聞)という語が用いられている。実際は月刊誌としての刊行となった。
- (10) シェーラ(Gela)にはANIC(国営水素燃料会社)の労働者居住区があり、その周辺に結成されたとされている(Baerli&Buttafuoco (a cura di), *Rivguardarsi*, 1997:17)。
- (11) 「無償で」は原文で“GRATIS”と大文字で表記され強調されている。
- (12) 編集グループには新旧左翼運動出身者、および政治行動はフェミニズム運動しか経験していない女性たちの二つの傾向があり、両者はレスピアニズムや家事労働賃金要求のようなテーマでは対立が際立っていた。とくに「家事労働賃金要求は共産党や議会外左翼グループから非常に敵視された」という(Cambria 1998)。
- (13) “*foromanzo*”第二次大戦後のイタリアで誕生し六〇―七〇年代に普及した、俳優の写真を用いたマンガ。
- (14) L.F.S. “*Il Volantone*”[「大きなチラシ」の意]と呼ばれた機関紙からの引用(“*Volantone*” di Lotta Feminista, 1973)
- (15) この記事を構成したのはカンブリアで、編集部座談会も彼女のコーディネーターによる。
- (16) イタリア共産党(PCI)の女性団体。中絶をめぐる党と対立し、一九八二年に独立した女性組織となった。今日に至るまで、イタリア女性運動の最大組織である。フェミニズム運動の充実したアーカイブを保持している。
- (17) この点は、基本的に組織名で発言し、個人名は一部の例外を除いてほとんど登場しないLFとは対照的である。
- (18) Lotta Feminista (1972) “*Offensiva*”
- (19) この時期すでにLFパドヴァグループは第一グループと第二グループに分裂していた。編集部はパドヴァ第一グループは賃金要求委員会を結成して独自の分析をすすめるため、この特集には参加しないという方針であることを報告している(*Effe*, 1974, n.6:34)。
- (20) Fondazione Badaracco, Archivio del femminismo, Busta 73, Fascicolo 10
- (21) マリアローザ・ダラ・コスタ(一九八六)『家事労働に賃金を』に収録された論文、G. F. ダラ・コスタ(一九七八―一九九二)『愛の労働』を参照されたい。

- (22) タイトルは正確には「年鑑：一九七二年以降のイタリアフェミニズム運動過程における場所、名前、集会、行動、労働」である。原題は *L'Annaccolughi, nomi, incontri, fatti, lavori in corso del movimento femminista italiano dal 1972* (1978)。
- (23) 総数三〇一のうち、政党系の団体で夥しい支部を全国においていたMLDが六二を占めており、性格の異なるこの団体を除くと、総数は二三九、そのうちの四五となる。七〇年代前半は大部分がバドヴァ、フェッラーラ、ヴェネツィアなど北部の都市であったが、一九七八年のこのリストにはローマ、ポテンツァなど中南部の都市が登場し、活動が南下拡大したことを示している。
- (24) 「下克上」「反乱」の意。*Sottosopra* の定期的刊行はわずかに五号で終わったが、その後一九八三年にミラノ女の本屋の冊子として刊行された (Graziani 1998)。その後も不定期に刊行され、今日に及んでいる。二〇一二年一〇月に七〇年代の最後の全国大会開催地であった南イタリアの *Paestum* で四〇年ぶりのフェミニスト全国大会が開催され、それに先立ち最新号が刊行された。ミラノのフェミニストグループは女の本屋や女性自由大学の活動に取り組み文化的フェミニズム運動を展開し、八〇年代以降のアーカイブ構築運動の主翼を担ってきた。
- (25) *Autocoscienza* (コンシヤスネス・レイジング) 実践運動の代表的グループ。 *anabasi* とはギリシア語で「内陸行」を意味するアナバシスのイタリア語。クセノフォンの著作のタイトルである。
- (26) 裁判は一九七六年一月まで続き、その間にLF、SLDメンバー三名が中絶宣言を行ったため、彼女らも裁判にかけられた。三名の中にはフェッラーラのLFメンバーであったフェミニスト経済学者アントネッラ・ピッキオ (Antonella Picchio) がいた。
- (27) 一九七八年に中絶の権利を認める法律が成立にいたる (Legge 194)。その後も保守派の運動によりこの法律の破棄を提案する国民投票が一九八一年に行われた。教皇ヨハネ・パウロ二世の中絶批判発言、国民投票直前の教皇狙撃事件にもかかわらず、保守的であると思われる南部も含めて中絶法の支持者が多数を占めた。
- (28) タラ・コスタはバドヴァ大学政治学部でネグリの助手であった。
- (29) *Centro di studi storici sul movimento di liberazione della donna in Italia* (イタリア女性解放運動史研究センター)。一九七九年にミラノの社会主義者でフェミニスト活動家であったエルヴェーラ・バダラッコ (Elvira Badaracco) が設立した。一九九四年バダラッコの死後、その遺志により、彼女の遺産でエルヴェーラ・バダラッコ財団 (Fondazione Elvira Badaracco) が設立され、活動を継承している。
- (30) フェッラーラではのLD運動とは距離のあるフェミニストによって一九八〇年に女性資料センターが設立され、図書館としても活動している。女の本の書評誌 *Leggere donna* は、著名なフェミニスト、ルチアーナ・トゥッファーニ (Luciana Turani) の絶大な貢献によって一九八〇年の創刊以来現在まで一般書店における定期刊行を続ける。イタリアでもっとも長い歴史をもつフェミニスト誌である。
- (31) *Piera Zumaglini* (1942-1994) トリノを代表するフェミニスト活動家でありトリノ女の家の設立、運営、フェミニズム運動資料収集に貢献した。一九九四年の早すぎる逝去後その遺志によりピエラ・スマツリーノ基金と文書館が設立された。
- (32) 労働者主義 (operismo) に依拠し、市民賃金を要求したアントニオ・ネグリ (Antonio Negri)、マッシモ・カッチャーリ (Massimo Cacciari) らをリーダーとする議会外左翼グループ
- (33) 一九五五年に結成された世俗的自由主義政党。六〇年代後半以降ラディカルな左派として中絶の自由化、終身刑の廃止などの課題に取り組んだ。
- (34) POのメンバーらが結成したグループ *Collettivo Milanese per la Liberazione Femminile* (女性解放ミラノ・コレクティヴ) のメンバーであったアドリアーナ・ペッロッタ・ラウッチ (Adriana Perrotta Rabissi) の一九八九年ミラノにおける聞き取り調査による。
- (35) *PO* や *Avanguardia operaia* (労働者の前衛) とならず、イタリアの労働者主義に基づく代表的新左翼運動グループ。一九七五年にローマで初めて行われた全国規模のフェミニストのデモを襲撃し、一九七六年に解散に至った。

- (36) 議会外左翼の代表的日刊紙。現在も発行されている。
- (37) LFの機関誌 *Quaderni di Lotta Femminista* の第一号 *L'Offensiva* (攻勢、キャンペーンの意) に詳細が報告されている。
- (38) LFのセリナーはローマ大学教育学部で開催された。
- (39) こうした行為は後年一九七五年二月に、イタリアのフェミニストたちがローマで初めて女性だけの全国デモを行ったとき、LCの男性メンバーが女性の隊列を襲撃するという事件として繰り返された。暴力と性的侮辱も同様であった。しかしLCは多くの女性メンバーの脱退を招き、翌一九七六年に解散に至った。もちろんLC解散の原因は選挙の敗北なども含めて複数あるが、この数年間のフェミニズム運動の前進はもはや「階級を割る」といった類いの批判の効力を削いでいたと言える。Zanetti (1998) によれば、一九七六年のパドヴァで行われた女性のデモでは、男性参加者は女性の指示に従い、隊列の横および後尾にのみ並んだ。
- (40) aOの投稿と同じ七月一日に *Gruppo Femminista toscano* (トリノのフェミニスト・グループ) による *Il Manifesto* の分離主義批判への反批判の投稿が、八月一日の *Lotta Continua* 誌にはLFによるLCへの「八月四日の *Il Manifesto* 紙にはLFによるaOへの応答が掲載された (*Lotta Femminista* 1972: 16-21)。LFは戦略的にLCの応酬を行っており、「女性問題」に関して新左翼グループに見解を表明させたことは一定の成果であったとしている。
- (41) 本書はセルマ・ジェイムズとの共著として一九七二年に出版され、ジェイムズによる英訳が同年刊行された。
- (42) イタリアに限らず、七〇年代フェミニズム運動の特徴のひとつは匿名性であり、チラシやパンフレット、雑誌記事は団体名や署名があっても、ありふれたファーストネームのみであることが圧倒的に多い。
- (43) この論文は共著 *Potere femminile e sovversione sociale*, 1972 Marsilio, Venezia にタラ・コスタ論文とともに *Il post della donna* のタイトルで収録されている。
- (44) 家事労働への賃金要求が賃金から排除されているすべての人々 (子ども、病人、老人、障がい者 etc.) への賃金のちがいが厳密に論じられることはない点も共通である。これについては後で検討した。
- (45) ズマツリーノはメルッチ (Melucci, 1982) の社会運動の定義「ひとつの運動に所属していると自己定義し、目に見えるネットワークによって結びついている様々なグループのまとまりの存在」に従い、イタリアで新しい質のフェミニズム運動が登場した時期を一九七〇・七一年とした。同書の七〇年代トリノのフェミニズム運動についての当事者の証言の記録は、結果としてLFの支部が作られることになったトリノを含めて七〇年代初頭のフェミニズム運動生成期におけるLFのインパクトを率直に示す結果となった。
- (46) *Rivolta Femminile, L'Anabasi, il Collettivo Milanese per la Liberazione Femminile, il Cerchio Spezzato, collettivo delle compagne* などが、一九七〇年に誕生してさる。
- (47) エッフェ誌の活動団体紹介を見ると、実際はもっと複雑で、あった。LFを名のらない関係団体や個人の連絡先が存在していたようである。
- (48) 数少ない事例としてMLDと *Rivolta Femminile* が挙げられる。政党組織であるMLDは同名の夥しい支部をイタリア全土に形成している。ローマで結成された *Rivolta Femminile* については、北部のいくつかの都市に同名のグループが誕生した。
- (49) 同年、ローマの *Movimento Femminista Romano* の前身である *Collettivo di Lotta Femminista* (LFとは別組織) が、オビートリノの *Collettivo di Via Petrarca* を誕生している。いずれも七〇年代フェミニズム運動を牽引する代表的グループとして成長していったことになる。
- (50) DemauとPOの女性たちにより一九七〇年に結成された *Collettivo Milanese* の呼びかけにより、ジェイムズのイタリアへの招聘が提案されたという。タラ・コスタらaO出身のLFメンバーに加えて、LFとは対照的なグループであった *L'Anabasi* のセレーナ・カスターディ (Serena Castaldi) の数名も参加していた (Zunaghi 1996: 104)。
- (51) 二月のローマでのMLDの集会のときには男性の主導的参加に批判がでたことを同書は伝えている。また証言などを通じてLFの立ち上げに際してPOの男たちが介

在していたことを指摘している。ただし六月のミラノでの集会、およびその準備会議では、POの男性メンバーは同席してはいたが、発言は控えてわたちのイニシアティブを脅かすことはなかったようである。

(52) ミラノのパダラッコ資料館 (Fondazione Badaracco) にはCDが閉館時にCSSMIDIに寄贈したヴェネットの資料がかなりあり、またミラノのLFについては二〇一〇年にメンバーのひとりであったルチアーナ・ベルコヴィッチ (Luciana Perovich) から寄贈されたばかりの資料も未整理の状態で見つかった。二〇一〇年の寄贈直後に筆者は未整理のこの資料を見ることのできるベルコヴィッチに資料館で会うこともできた。しかしベルコヴィッチのバドヴァのLF、とりわけマリアローザ・ダラ・コスタに対する感情的な拒絶感は今なお根深く、解決されていないことがわかった。そうした感情的亀裂が世代的異なるパダラッコ資料館の管理者である若く気鋭のフェミニスト、ラウラ・ミラーニ (Laura Milani) にも世代を越えて継承されていることも衝撃的であった。しかしミラーニは寄贈されたばかりの未整理のベルコヴィッチの資料を見せられ、ベルコヴィッチとの対話の機会を作ってくれた。特に記して感謝したい。

これらの運動や議論の当事者の多くは存命であり、聞き取り等による証言も得られるが、今日なお七〇年代の運動内部の亀裂は大きく、多くの見解は感情的であり、対立、矛盾するものも少なくないことから、本論文においては基本的に書かれた資料を採用し、オーラルな証言は用いないこととした。

(53) パダラッコ資料館の「ベルコヴィッチ・アーカイブ (Archivio Perovich)」に含まれるミラノLF内部資料

(54) シェイムスは *autooscienza* ではなく *presa di coscienza* と古くから階級意識の獲得の意味で用いられる語を使用しているが、ここではイタリアのフェミニストが用いるCRを示す語である *autooscienza* と同じ意味で *presa di coscienza* を用いている。

(55) たがねはICの活動家であり、その後トリノフェミニストグループに参加したヴィッキー・フランツィネッティ (Vicky Franzinetti) は一九七二年にロンドンでシェイムスに会い、強い感銘を受けたことを述べている (Zunaglin, 1996)。

(56) “*emancipate*”。イタリアの第二波フェミニズムは「解放」を示す語として、伝統的に用いられて来た *emancipazione* ではなく *liberazione* を用いて、新しい「解放」観を表した。

(57) トリヴェネト *triveneto* とは、イタリア北東部のトレ・ヴェネツィエ *The Venezie* (三つのヴェネツィア) の形容詞である。The Venezie とは Venezia Giulia, Venezia Euganea, Venezia Tridentina の三つの地域の総称である。

(58) 一九八二年の中絶法をめぐる国民投票の際のフェミニストの行動に、もはやのLD運動の姿はなご。

(59) *Teorie del femminismo* は六巻本として一九七八年に出版された。その内の *Lessico politico delle donne* が二〇〇二年に *Fondazione Badaracco* によって再販された。

(60) なお、この時期には英語圏でいわゆる家事労働論争が展開しており、イタリアでも女性学研究の学術雑誌 *Donaunomafemme* (DNWF) が一九七八年から七九年にかけて *Molineux Beedry* の英語圏の主要論文を紹介し、特集を組んでいるが、イタリアでの議論の拡大には至らなかった。

(61) *Donna Woman Femme*。一九七五年に創刊された女性学の学術誌。現在も刊行されている。

(62) 例外として挙げられるのは *Chister, Del Re, Forte, Oltre il lavoro domestico* (1979) である。同書はLFおよびLDの運動論を理論研究として整理した著作であり、とくに *Adel Re* はマルクス主義フェミニズムの立場から、家事労働を再生産労働と定義し、再生産と生産の関係を論じている。

(63) サラチエーノは *lavoro familiare* をメインで発展した概念であるとして *Kickbusch* (1975) に言及している (Saraceno 1980:5)。

(64) *Ergas* (1986) は社会運動論の視点から七〇年代フェミニズムを論じた数少ない論文であるが、そこには、ホスターの類いも含めて、LFやLD運動への言及は存在しない。サラチエーノは百科事典 *Treccani* (Treccani) にフェミニズムの項目を書いており、七〇年代の動向として *autooscienza* とともにLD運動を挙げている。また八〇年代以降のアカデミズムの新たな動きとして経済学に関連して労働概念の見直しを挙げ、「家族労働 (*lavoro familiare*)」(Saraceno 1980) ほかへの拡張に触れている。しかし七〇年代の運動との関係については触れられておらず、両者は接点のない別の動きとして記述されている (Enciclopedia Treccani,

“femminismo” 1994)。

- (65) 筆者は一九八〇・八二年の二年間のイタリア留学中、様々なフェミニストの集会や学生グループに参加した。一九八一年には中絶法をめぐる国民投票があり、女性運動は高揚していたが、この時期にはもはや家事労働賃金要求運動の動きも、それについての言及も皆無であった。
- (66) イタリアでは *autoconsienza* あるいは *presa di coscienza* と呼ばれた。両者はニュアンスがかなり異なり、前者がこの時代の独特の小グループによる内省的な主体形成を中心とする活動であるのに対し、後者はもっと一般的な運動に参加する一人一人の意識変革全般を表している。前者は政治運動一般に使用される後者と差別化するために作られたフェミニストの造語である。
- (67) *Mariarosa Dalla Costa, Potere femminile e sovversione sociale* (1972), *Lotta Femminista, L'Offensiva* (1972), *Collettivo Internazionale Femminista, 8 Marzo 1974* (1974), *Aborto di stato: strage delle innocenti* (1976) の四冊である。
- (68) LFのメンバーであったフェミニストたちの中には、今日なお情緒的レベルでのわだかまりを含んだ対立が克服されていない状況を「二〇一〇―二〇一三年に実施した聞き取り調査により知ることができたが、この情緒的対立の土台にある構造を読み解くには、運動に対する共感とともに、この運動に一定の距離をおいた、外部からの視点が不可欠である。
- (69) 第三回世界女性会議のナイロビ将来戦略は家事労働を含む無償労働の測定評価の課題を初めて明記したが、その背景にはこの会議でのセルマ・ジェイムズ(ダラ・コスタの共著者、翻訳者)によるグループの熱心なロビー活動があったことを銘記した。
- (70) 今回の筆者が発見したのは、LFのメンバーであったフェミニスト経済学者アン・トネッラ・ビッキオのインタビュー記事のみである (Picchio 2009)。
- (71) この会議の記録集は翌一九八四年に *Produrre e riprodurre: cambiamenti nel rapporto tra donne e lavoro* として刊行された。

主要参考文献

- ・ AA.VV., 1984, *Produrre e riprodurre—cambiamenti nel rapporto tra donne e lavoro. Primo Convegno internazionale delle donne dei paesi industrializzati promosso dal movimento delle donne di Torino, Palazzo del Lavoro 23-24 e 25 aprile 1983*, Cooperativa Editrice, il manifesto anni 80, Roma.
- ・ AA.VV., 1987, *Il movimento femminista degli anni '70, Memoria*, nn.19-20, 1987
- ・ Teresa Bertolotti & Anna Scattigno (a cura di) (2005), *Il femminismo degli anni Settanta*, Viella, Roma.
- ・ Franca Balsamo, 1998, *Chiara Saraceno, Dalla parte della donna*, in Aida Ribero & Ferdinanda Vigliani (a cura di) (1998), *Cento titoli: Guida ragionata al femminismo degli anni Settanta*, Cento studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- ・ Franca Bimbi (a cura di), 1977, *Dentro lo specchio: riproduzione del ruolo e autonomia delle donne*, Mazzotta, Milano.
- ・ Annarita Buttafuoco & Emma Baeri (a cura di), 1997, *Riguardarsi: Manifesti del movimento politico delle donne in Italia*, Protagon, Siena.
- ・ Anna Rita Calabrò & Laura Grasso, 1985, *Dal movimento femminista al femminismo diffuso—Storie e percorsi a Milano dagli anni '60 agli anni '80*, Fondazione Badaracco, FrancoAngeli, Milano.
- ・ Adele Cambria, 1998, *Effe*, in Aida Ribero & Ferdinanda Vigliani (a cura di) (1998), *Cento titoli: Guida ragionata al femminismo degli anni Settanta*, Cento studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- ・ Collettivo Internazionale Femminista (a cura di), 1975, *8 Marzo 1974: giornata internazionale di lotta delle donne*, Marsilio, Padova-Venezia.

- ・ Collettivo Internazionale Femminista, 1976, *Aborto di stato: strage delle innocenti*, Marsilio, Venezia-Padova.
- ・ Comitato per il salario al lavoro domestico di Padova, 1975, *Operate della casa*, Marsilio Editori, Venezia-Padova.
- ・ Giovanna Franca Dalla Costa, 1978, *Un lavoro d'amore*, Edizioni delle donne, Roma. 伊田久美子譯 (1991) 『愛の労働』インパクト出版会
- ・ Mariarosa Dalla Costa, 1971, *Donne e sovversione sociale*, in Mariarosa Dalla Costa & Selma James (1972), *Potere femminile e sovversione sociale*, Marsilio Editori, Padova. ヌルーン 7221 訳 (1980) 「女性ソフトウェア社会の変革」サレンキョー編『資本主義 家族 個人生活』亜紀書房
- ・ マリローザ・ダラ・コスタ (1986) 『家事労働に賃金を』フェミニズムの新たな展望』伊田久美子・伊藤公雄訳、インパクト出版会
- ・ Mariarosa Dalla Costa & Giovanna Franca Dalla Costa (a cura di), 1993, *Donne e politiche del debito*, FrancoAngeli, Milano 伊田久美子監訳, 1995, 『約束された発展——国際債務政策と第三世界の女たち』インパクト出版会
- ・ Mariarosa Dalla Costa & Giovanna Franca Dalla costa (a cura di), 1996, *Donne, sviluppo e lavoro di riproduzione- questioni delle lotte e dei movimenti*, FrancoAngeli, Milano.
- ・ Alisa Del Re et al., 1979, *Oltre il lavoro domestico: il lavoro delle donne tra produzione e riproduzione*, Feltrinelli, Milano.
- ・ *DonnaWomanFemme: Lavoro, non lavoro*, nn.12-13,1979, Editrice coop. UTOPIA, Roma.
- ・ Wendy Edmond & Suzie Fleming, 1975, *All work and No Pay- Women, Housework, and the Wages Due*, Power of women collective& Falling Wall Press, London.
- ・ *Effe* 1973-1979, Roma.
- ・ *Enciclopedia Treccani*,1994,
- ・ Yasmine Ergas, 1982, 1968-79—*Feminism and the Italian Party System: women's Politics in a Decade of Turmoil*, *Comparative Politics* Vol.14, No.3, The city University of New York
- ・ Yasmine Ergas, 1986, *Nelle maglie della politica: femminismo, istituzioni e politiche sociali nell'Italia degli anni '70*, FrancoAngeli, Milano.
- ・ Silvia Federici, 1976, *Salario contro il lavoro domestico*, Collettivo Femminista napoletano per il salario al lavoro domestico, Padova.
- ・ Fondazione Badaracco, 2003, *Archivi del femminismo. Conservare progettare comunicare*. Atti del convegno, 5-6 ottobre 2001, fondazione Badaracco, Milano.
- ・ Fondazione Badaracco, Archivio del femminismo.
- ・ Fondazione Badaracco, Archivio Luciana Percovich.
- ・ Manuela Fraire, Rosalba, Spagnoletti, Marina Viridi, 1978, *L'Almanacco:luoghi, nomi, incontri, fatti, lavori in corso del movimento femminista italiano dal 1972*, Edizioni delle donne, Roma.
- ・ Manuela Fraire (a cura di), 1978-2002, *Lessico politico delle donne: Teorie del femminismo*, Fondazione Badaracco, FrancoAngeli, Milano.
- ・ C.Gamba, F.Geri, A.Monti, G.Zerman (a cura di), 1974, *Siamo tante, siamo donne, siamo stufe!*, Collettivo editoriale femminista, Nuovi Editori, Padova.
- ・ Mariella Gramaglia, 1987, *Affinita' e conflitto con la nuova sinistra*, in *Memoria* nn.19-20,1987.
- ・ Graziani 1998, *Sottosopra*, in Aida Ribero & Ferdinanda Vigiani (a cura di), 1998, *Cento titoli : Guida regionale al femminismo degli anni Settanta*, Centro studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- ・ Gruppo L'Anabasi, 1972, *Donne e bello*, Milano.
- ・ Elida Guerra, 2004, *Femminismo/femminismi: appunti per una storia da scrivere*, Genesis III/1, 2004, Viella, Roma.

- ・伊田久美子 (2009) 「労働力の女性化」から「労働の女性化」へー愛の労働のゆくえー現代思想 2009年2月号
- ・伊田久美子 (2010) 「マルクス主義フェミニズム・M.ダラ・コスタ」女性のパワーと社会の変革」(伊藤公雄・井上俊編『近代家族とジェンダー』世界思想社)
- ・磯野富士子 (1960) 「婦人解放論の混迷」朝日ジャーナル(上野千鶴子編『主婦論争を読む』II (1982) 勁草書房に収録)。
- ・磯野富士子 (1961) 「再び主婦労働について」思想の科学」(上野千鶴子編『主婦論争を読む』II (1982) 勁草書房に収録)。
- ・Selma James, 1985, *Strangers & sisters- Women, Race and Immigration*, Falting Wall Press, London.
- ・ *Leggere Donna*, 1980-, Associazione culturale Leggere Donna, Luciana Tufani Editrice, Ferrara.
- ・ Libreria delle donne di Milano, 1987, *Non ti credere di avere dei diritti*, Rosenberg & Sellier, Torino.
- ・ Lotta Femminista, 1973, *Il Volante: volante nazionale di Lotta Femminista sul salario di lavoro domestico e gli assegni familiari*, Milano.
- ・ Lotta Femminista, Collettivo Internazionale Femminista, 1972, *L'Offensiva*. Musolini editore, Torino.
- ・ Luisa Passerini, 1991, *Storie di donne e femministe*, Rosenberg & Sellier, Torino.
- ・ Antonella Picchio, 2009, *Pausa lavoro:interrogare l'economia*, Via Dogana n.89, Libreria delle donne di Milano, Milano.
- ・ Aida Ribero & Ferdinanda Vigliani (a cura di), 1998, *Cento titoli : Guida ragionata al femminismo degli anni Settanta*, Centro studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- ・ Chiara Saraceno et al., 1980, *Lavoro mal diviso*, De Donato, Bari.
- ・ Emma Schiavon, *L'Offensiva*, in Aida Ribero & Ferdinanda Vigliani (a cura di) (1998), *Cento titoli : Guida ragionata al femminismo degli anni Settanta*, Centro studi e documentazione pensiero femminile, L. Tufani, Ferrara.
- ・ *Sottosopra* 1973-1976, Milano.
- ・ Marina Zancan, 1977, *Lavoro domestico: la malattia di tutte*, in Franca Bimbi (a cura di), *Dentro lo specchio: riproduzione del ruolo e autonomia delle donne*, Mazzotta, Milano.
- ・ Marina Zancan, 2003, *Conservare, progettare, comunicare*, in Fondazione Badaracco, 2003, *Archivi del femminismo. Conservare progettare comunicare. Atti del convegno, 5-6 ottobre 2001*, Fondazione Badaracco, Milano.
- ・ Anna Maria Zanetti, 1998, *Una ferma utopia sta per fiorire —Le ragazze di ieri: idee e vicende del movimento femminista nel Veneto*, Marsilio Editori, Venezia.
- ・ Grazia Zuffa, 1987, *Le doppie militanze. Donna comunista, donna femminista*, in *Memoria* n.19-20, 1987.
- ・ Piera Zumaglini, 1996, *Femminismi a Torino*, FrancoAngeli, Milano.